

Bulletin



建築のその周辺 エンジニアから見た建築デザイン

特集 建築のその周辺Ⅱ

大会 JIA 建築家大会 2025 千葉

ひろば 常任幹事会からの報告

金曜の会、渋谷地域会、再生部会、住宅部会

わたしの師

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

温故知新

交流委員会活動報告

学生の会 @joint 活動報告



建築空間にスマートに調和する 意匠設計者向けインテリア金物を展開

株式会社アシストは、1969（昭和44）年に上西建装株式会社として大阪市東住吉区で創業しました。建築用金物の卸売りから始まり、その後、内装用の金物を次々と開発し、インテリア向けの専門メーカーとして大きく成長。1982（昭和57）年には社名を自社ブランド名の「アシスト」に変更。階段の滑り止めや段鼻保護見切り、床材の種類や厚みに合わせた見切り金物・段差解消金物など、足もとの金物に特化してラインナップを増やしています。2017（平成29）年に立ち上げた新ブランド「AFOLA」は、よりデザイン性の高い商品を取り揃え、ホテルや商業施設、公共施設などで広く使われています。

オリジナルの内装用金物を開発

当社は、大阪の金物屋で働いていた父が独立し創業しました。最初は建築用金物を問屋から仕入れ、小売店に卸していましたが、しばらくして販売先を内装用資材を扱うインテリア業界に変更。国内ではマンションの建設が進み、カーペットも広く普及しましたが、それを押さえる金具は外国製ばかりでした。当社はオリジナルの床材押さえ金物を開発。以来、床金物の「への字押え」「フロアライン」や、階段滑り止め・ノンスリップ（アシステップ）など、ラインナップを増やしてきました。

会社が15周年を迎える時に父が突然亡くなり、それまで経理をしていた母が後を引き継ぎました。大変な窮地でしたが、社員一丸となって営業を続け、そこからさらに飛躍的に会社が成長しました。2010（平成22）年に私が社長に就任してからも、社員全員で団結し、家族のように大切に社風を大事にしています。

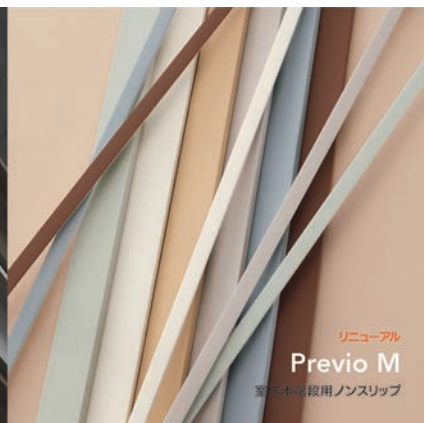
デザイン性を重視した 新ブランド「AFOLA」

2017（平成29）年にはデザイン性を重視した新ブランド「AFOLA」を立ち上げました。建築家の皆様に、“このデザインの金物だったら取り付けてもいい”と思っていただけるような商品を目指し、プロダクトデザイナーの協力を得ながら開発しています。

室内鉄骨モルタル階段用ノンスリップ「Previo T」は、シンプルで空間に



Verta H2 入巾木 / Previo M リニューアル



なじむ商品として評価され、グッドデザイン賞 2020のベスト100にも選ばれました。その後もPrevio Tのコンセプトを受け継いだステンレス製の「Previo R」、屋外階段用の「Previo G」とラインナップを増やしています。

これまで当社の商品は改修で利用いただくことが多かったのですが、「AFOLA」をきっかけに、新築物件で採用いただく機会も増えていきます。

コーナーガードや 屋外・外部階段用金物も開発

「AFOLA」は今年新たに4つの商品を発売しました。バイブレーション仕上げる美しい、アルミ製のホテル・店舗向けコーナーガード「Verta E2」と、

不燃化粧板用の壁見切りジョイナー「Verta J1」。安全性に配慮したシャープなデザインの入巾木「Verta H2」。さらに、ノンスリップの定番シリーズ〈Previo〉からは屋外RC階段用段鼻保護見切りの「G7」をリリース。「G7」は、脆弱なRC階段に対し、耐久性の高いステンレスの角棒を段鼻に埋め込むことで、割れや欠けを予防します。

機能性や安全性、施工性を大切にしてきたこれまでの商品づくりがあるからこそ、新しい商品開発にチャレンジすることができています。ぜひ当社の商品の感想をお聞かせください。これからも皆様からのご意見を参考に商品づくりを進めてまいります。

Assist 株式会社アシスト

<https://www.assipie.jp>

ノンスリップや床金物など、インテリア金物の開発、製造、販売、物流。また、内装仕上工事業を行う。

〈本社〉大阪市東住吉区今川4丁目11番3号 TEL: 06-6703-5670 (代) FAX: 06-6702-0473
〈東京営業所〉東京都足立区一ツ家3丁目11番4号 TEL: 03-3859-5670 (代) FAX: 03-3859-5674
〈福岡営業所〉福岡市博多区板付1丁目3番4号 TEL: 092-433-5678 (代) FAX: 092-433-5667

目次

●特集

4 建築のその周辺

エンジニアから見た建築デザイン

4 構造デザインの変遷

梅沢建築構造研究所 梅沢良三

5 意匠と構造を融合する構造家を目指して

山田憲明構造設計事務所 山田憲明

6 光のデザイン

Lumimedia lab Inc. 岩井達弥

7 空間を創るということ

Arup 久木宏紀

●大会

8 JIA 建築家大会 2025 千葉 アクセスマップ／トークセッション紹介／タイムテーブル

●ひろば

14 常任幹事会からの報告 「建築家大会2025千葉」の成功に向けて！

大宇根建築設計事務所 渡邉太海

15 支部活動紹介 金曜の会 共感が想像するサステナブル建築の未来

+iarchitecture 今井祐太郎

16 渋谷地域会 「JIA 渋谷アーキプライズ2024」

高階澄人建築事務所 高階澄人

17 再生部会 イタリアの旧工場地区再生と産業遺産の保存活用

やなぎざわ建築設計室 柳沢伸也

18 住宅部会50周年を迎え

アトリエ慶野正司 慶野正司

19 わたしの師 こんなものは！

スタジオ・アルテック 室伏次郎

20 覗いてみました他人の流儀 宮崎秀生氏に聞く 空間の音響をより良くする提案を

Bulletin 編集WG

22 海外レポート ロマンチック街道のまちづくり

バイエルン州建築家協会登録建築家 水島 信

24 卒業設計をふりかえる 封印されていた原点

相坂研介設計アトリエ 相坂研介

25 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第12回

施主が「気に入らない」設計は設計者の債務不履行となるのか

榎本・藤本・安藤総合法律事務所 安藤 亮

26 温故知新 先達に学ぶ 地域に根ざす建築・まちづくり 事始め

アルセッド建築研究所 三井所清典

27 抱負を語る 時が育む暮らしの場

川島真由美建築デザイン 川島真由美

抱負を語る 柵の無い日本と、まざる建築

山路哲生建築設計事務所 山路哲生

28 活動報告 交流委員会 Bグループ 年間活動報告

シーカ・ジャパン 安藤達彦

29 交流委員会 Dグループ 施設見学会・懇親会開催

共同カイテック 賛田大河

30 学生の会 @joint 活動報告

卒業制作にあたって

東京電機大学 谷 倅多

建築から考える「豊かな暮らし」とは

昭和女子大学 小柳日菜子

●あとがき

31 ひといき クラシック音楽との長い付き合い

HAL 設計室 荒井 洋

31 支部総務委員会からのお知らせ／編集後記

2 パートナーズアイ 株式会社アシスト 建築空間にスマートに調和する意匠設計者向けインテリア金物を展開

表紙写真：(上段) 左：「梅田スカイビル」コロナ照定点灯実験、中：アルジェリアのオラン大学実施設計パース、右：「認定こども園なご幼稚園」設計
川島真由美建築デザイン、(下段) 左：Füssenの街並み、中：ルイ・ヴィトン美術館 階段室のゲーリーのスケッチ、右：ヤマハホール内観

エンジニアから見た建築デザイン

構造デザインの変遷

秋号では、建築設計の強力な設計パートナーのエンジニアの方々に「建築デザイン」についての想いを語っていただきます。まず初めに構造家の梅沢良三氏。一見ご専門の構造分野の内容に見えつつも、分野の関わりの中にある建築デザインへの想いも根底に見えます。(編集長)

梅沢建築構造研究所
梅沢良三

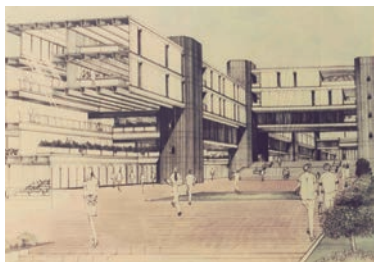


1960年代：万博前夜の熱気

1968年春、私は木村俊彦構造設計事務所に就職した。1970年大阪万博の2年前であり、大谷幸夫の住友童話館や、大高正人による万博メインゲートの実施設計が佳境に入っていた。1970年の大阪万博は、建築構造の新技术のオンパレードであった。お祭り広場の巨大トラス、膜構造、テンション構造など、コンクリートから軽快な鉄骨構造へと移行する流れの中に、のちのハイテク建築の予兆が見られた。一方、設計ツールは鉛筆と算盤、計算尺しかない時代であったが、木村は自ら解析プログラムを書き、住友童話館の振動解析に挑戦していた。現在と対照的に当時は、手段は乏しくも、創造力に満ちていた。

1970年代：構造とデザインの融合

当時の建築は、構造そのものがデザインの核であり、コンクリート打ち放しが多用され、建築の強さが力強く表現されていた。丹下健三が設計したアルジェリア・オラン大学(70年代前半)は、三次元空間に基本モジュールを増殖させる手法でキャンパスを構成した好例である。また、大高正人と木村俊彦は千葉県立図書館でプレグリッドシステムを開発し、建築界に衝撃を与えた。十字型ユニットを工場で生産し、ポストテンションによって強度を持たせ、三次元空間に増殖可能な構造を実現したのである。こうした革新は、人口増大と都市成長を背



1973年アルジェリアの
オラン大学実施設計パース



竣工当時のオラン大学

景に「メタボリズム」として結実した。建築・構造・設備が三位一体でデザインされ、数々の名建築が生まれた。まさに建築が若者を虜にした黄金時代であった。

1980年代：環境とミニマリズム

1980年代に入ると、世界的な環境問題の顕在化とともに、建築界にはミニマリズムの潮流が押し寄せた。透明で軽快な建築が追求される一方、省エネや環境との矛盾が浮上し、やがて「サステナブル」という理念が叫ばれるようになった。

1990年代：バブル崩壊とハイテク建築の終焉

1990年代、バブル崩壊により、かつて隆盛を誇ったハイテク建築は急速に姿を消した。一方で、レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャース、ノーマン・フォスターらは、環境建築へと舵を切り、生き延びを図った。建築デザインの矛盾を環境テクノロジーで解決しようとする試みは、今も続いている。

阪神・淡路大震災以降の防災建築

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生し、日本の建築界は大きな転機を迎えた。旧耐震建築の脆さと新耐震基準の有効性が同時に示され、免震建築の普及が一挙に進んだ。さらに2011年3月11日の東日本大震災は「災害時に機能する建築」を社会に根付かせた。

現代：木造と環境の時代へ

2010年、脱炭素社会を目指して「公共建築物等における木材の利用促進法」が施行され、現在では木造建築の開発競争が続いている。目まぐるしい時代の変遷の中で、建築も構造も創造の源は常に「哲学(イズム)」であった。しかし、地球規模の環境・エネルギー問題を抱え、多様な価値観が交錯する現代において、共通の価値観を持つことは容易ではない。

かつてのように若者を虜にする熱気がなぜ伝わらないのか——それこそが、先の見えない現代建築界が抱える最大の問いである。私は時々のデザインの変遷を読みながら己のなすべきことをやってきたと思っているのだが。

意匠と構造を融合する 構造家を目指して

現代の木質構造界を牽引する構造家である山田憲明氏に「建築デザイン」との出会い、現在の立場からの建築の見え方や想いをうかがいました。(編集長)

山田憲明構造設計事務所
山田憲明



特集

私が建築への憧れを抱いたのは、高校時代に受けた現代文の模試で「建築は人間の願いや祈りといった思想がかたちになったものだ」という建築を哲学的に捉える文章を読んで感激したのがきっかけである。建築学科を志望する同級生からも刺激を受けて建築を目指した。

京都大学入学当初は意匠志望であったが、デザインに工学的な根拠を持ちたかったのに対し、コンセプトが重視される設計演習などに馴染めず悶々としていたうえ、4年生の研究室配属で第一志望の計画系の研究室に落ちてしまった。安心していただけ、鋼構造研究室の西澤英和先生(現関西大学名誉教授)に「一緒に面白いことをやろう!」と旧山邑邸の改修や薬師寺大講堂の復元プロジェクトに関わらせていただき、構造や木造、それを作り上げる職人の世界の広さと奥深さを学んだ。大学院を目指した試験では不合格となったが、試験の面接官であった建築史の故加藤邦男名誉教授から将来の展望を聞かれ、「意匠と構造の融合を目指しています」と答えたところ、「とても良い考えだ」と言ってもらい、自分の方向が間違っていないのだと確信した。

進路を決められないでいた4年生の年度末に部活のコンパでたまたま隣の席になった学科と部活両方の1年先輩である山田真也さん(現ヤマダ・アーキテクチャ代表)に、進路を意匠と構造で悩んでいる話をしたところ、「構造家」という存在と、渡辺邦夫さんをはじめとしたSDGのメンバーが執筆している『建築文化』(彰国社、現在休刊)の「構造家列伝」という連載を教えてくれた。構造家列伝にはトロハ、アラップ、エッフェルといった偉大な構造家の思想と哲学、独創的で美しい構造作品の数々が格調高い文章と写真で紹介されていた。特にマイヤールの力学に対する柔軟な発想から生まれる造形美や、ネルヴィの素材や工法の追求から生まれる繊細な構造に深い興味を持ち、後年、彼らの傑作であるサルギナトーベル橋やローマ小体育館を間近で見たときには心が打ち震えた。意匠と構造を融合する美しく創造的な世界に魅了され、構造家が主宰する構造設計事務所で修業することを決めた。就職活動で構造家の事務所を訪ねると、志だけを持つ無知な若僧にどなたも親身に話をしてくだ

さった。特に本特集でも執筆されている梅沢良三さんの「頑張って続けていれば必ず誰かが見ていてくれる」という激励の言葉は今でも心に深く残っている。

最終的に修業先として決めたのは、見学に行った長谷川一美さんが教えてくれた、増田一真が主宰する増田建築構造事務所だった。増田自身もマイヤールやネルヴィを崇敬していて、RC造の可塑性を活かした曲面構造やPCa構法に取り組んでいただけでなく、伝統木構造に根差した新しい木構造を研究・実践していた。これに歴史的な深みと大きな可能性を感じて入所を決意したのが、私にとって現在の活動に直接繋がる最も重要な判断だった。15年にわたる修業時代は本特集の趣旨ではないので別の機会に譲りたい。

コンセプトやイメージによってさまざまな示唆を与えてくれる優れた建築家は、私にとってかけがえのない尊敬すべき存在である。建築空間は、構造体が見える見えないにかかわらず構造が創り出す、それを建築家とともに主に担う構造設計という仕事に大きな魅力と責任を感じている。特に素材サイズが限られる木造の構造設計は、小さい部材で大きな空間をつくりだす難しさがある反面、多様な素材—接合—形態を用いて無限の構造が考えられ、仕上げにもなる。多くのプレイヤーが関わり建設プロジェクト自体がストーリーになっていくことも魅力である。いつかマイヤールやネルヴィのように、新しい価値をつくりだし、いつかは時代を超えて普遍的な価値を認められるような思想や作品を後世に残せたらと考えている。



斎藤公男先生に引率いただき、金箱温春さん、多田脩二さん、与那嶺仁志さんと2011年にサルギナトーベル橋を視察した

光のデザイン

—建築家とともに歩んだ照明デザイン—

近年の空間設計には欠かせない照明デザイナーとして活躍されている岩井達弥氏に、「建築デザイン」との出会い、現在の立場からの建築の見え方や想いをうかがいました。(編集長)

Lumimedia lab Inc.
岩井達弥



私と同じ1950年代生まれで、建築をめざした人は多かれ少なかれ丹下健三氏の国立代々木競技場の影響を受けている。父が建築家で、建築雑誌に囲まれて育った私もその一人である。大学で建築を学んだが、設計に長けた同級生たちを見て、人と違う専門性を身につけた方がよいと思った。高校時代に吹奏楽部でホルンを吹いていた私はホール音響に興味を持ったが、音響は複雑な計算を必要とし、結局は挫折した。

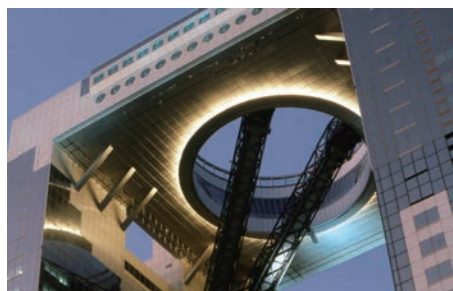
照明との出会いは遅く、就職活動の時であった。旧ヤマギワ(以下Y社)という照明会社が建築学生を採用していると知り、応募した。当時Y社はヨーロッパのデザイン照明を輸入販売する先駆者であり、亀倉雄策や倉俣史朗といった錚々たるデザイナーをご意見番としていた。そうした中でデザインから建築分野への進出を図るべく、TLヤマギワ研究所(TL研)という建築照明デザイン会社が設立されたばかりであった。建築照明デザイナーは建築を理解していなければならないという考えから建築学生を募集しており、私は幸運にも入社し、照明を学びながら生業とすることになった。

TL研には、ルーヴル美術館のガラスのピラミッド(I.M.ペイ設計)の照明を手掛けたアメリカの照明コンサルタント、クロード・エンゲル氏が指導者として関わっており、その考え方に触れる機会を得た。TL研の最初の大きな仕事は、日建設計の林昌二氏と小倉善明氏が設計した新宿NSビルであった。約130mの吹き抜けを照らす照明には、航空機の着陸用ビームランプを用いるという斬新な手法が採られた。空間のプロポーションと必要な光の広がりを考えれば、極めて合理的な方法であった。入社して間もない私にとって、この経験はその後の照明デザインの根底をなしている。

1990年少し前からは、梅田スカイビルの仕事を担当した。日本初の連結超高層で、設計者の原広司氏は「すべてをデザインする」と語るほど意欲的であった。その言葉の通り、現場事務所には1/5ほどの室内展開図による石張りスケッチや、2層吹抜けに張られた外観カーテンウォールのデザイン検討用立面図が並び、原氏自らが泊まり込みで作業していた。徹夜明けの姿に何度か遭遇し、自ら手を動かす建築家の情熱に強く刺激を受けた。

しばらくして、谷口建築設計研究所から依頼を受け、豊田市美術館の仕事を担当することになった。谷口吉生氏の建築はシンプルで、照明もできるだけ目立たないことが求められた。当初の打ち合わせで、パートナーの高宮真介氏から「より建築と一体となった照明を」との要望があり、私は照明用トラックとウォールウォッシャー照明を一体化したユニットや、天井裏に大反射鏡を設置した指向性光天井など、30代の若さに任せた斬新な提案を行った。谷口氏は「初めてのことは必ず実験してね」とよく言われ、現場に展示室の実寸モックアップを作り検証も行った。

1995年の開館後、私は独立したが、その後も幾度かのLED化改修や高橋節郎館の増築などを担当した。そのたびに責任を持って改修を進める建築家の真摯な姿勢に、深く敬服した。さらに、京都国立博物館 平成知新館の新築や、長野県立美術館 東山魁夷館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の改修なども手掛けた。2018年頃、谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館の計画の折には、谷口氏に照明デザインについて直接説明する機会があり、当時導入を始めた照明シミュレーションで計画をお見せした。その際「わかりやすい」とのお言葉をいただいたことは、今でも私の仕事の大きな励みとなっている。



左：「梅田スカイビル」
工事中、コロナ照明(リング状の光)点灯
実験。1992年頃。
右：「豊田市美術館」左側の高橋節郎館の
増築が終わった今年(2025年)の外観。
(撮影：増田好郎)

空間を創るということ

エンジニアリング集団 Arup の設備部門に所属される設備設計家の久木宏紀氏に、「建築デザイン」との出会い、現在の立場からの建築の見え方や想いをうかがいました。(編集長)

Arup
久木宏紀



環境設備設計に従事して早10年以上経ちました。幼少期からチラシの間取図を眺めながら、「この部屋をどう使おうか」と考えることや、住宅紹介番組が好きだったり、建築の“中身”が好きで建築学科に入りました。大学では、やはり空間の在り方や使われ方を追求していくことに興味をもち、環境設備設計を志し今に至ります。卒業後 Arup に入社し、数年は環境計画に近い機械設備設計を中心に経験して、エンドユーザーの使い勝手により近い電気設備設計にも領域を拡大しました。ひと口に室や空間といっても、ハードを提供していて、そこをどう使われるのかは最終的には使用者に委ねられます。建築や敷地を環境的にも使い勝手的にもより良くすることを重視し、実現のために機械・電気設備だけでなく室環境を統合するチームの一員としてプロジェクトに携わる必要があると考え、日々業務に取り組んでいます。

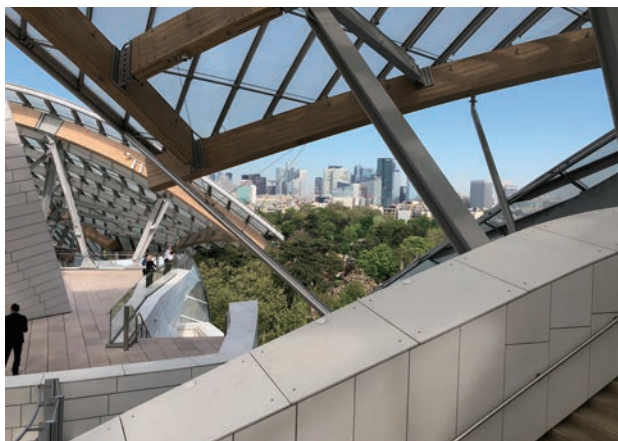
環境設備という割に、ここまでエネルギーやCO₂の話に触れていませんが、これは環境設備設計だけの責務ではなく、建築に携わる多様な設計者やオーナー、もちろんエンドユーザーなどすべての方の責務です。そういった視点で、設計中も建築分野の方や施主との対話を大事にしています。

昨今、自動制御やAIなどのセンサー・制御機器類の充実化に伴い、空間のハイレベルな環境制御ができるようになりました。一方で、トレンドになりつつあるのは、空間の非均一化です。コロナ禍を経て、昔のようにオフィスビルだと一律26℃という設計だと、空席率の高さか

らエネルギーの無駄もあるでしょうし、均一化された空間が何人にも快適とは限りません。窓際はあえて日射を受け入れるような設計にしたり、日本の四季や方位の特徴に呼応する半屋外空間があったり、多様な空間を創っていくことが、多くの方にフィットできる建築とも言えます。自然の享受と技術の高度化を“いい感じ”に共存させることは、先に述べた「環境的に使い勝手を良くする」ということにも繋がっていきます。

「音・光・風・熱・水」のような元素的な環境要素もあれば、空間のボリューム感や雰囲気といった数値化しきれない要素も建築の空間の持つ魅力の1つだと思います。

最後に環境的にも雰囲气的にも空間の魅力が溢れている数あるお気に入りの建築の中から1つだけ紹介させていただきます。パリにある「フォンダシオン・レイ・ヴィトン」(通称レイ・ヴィトン美術館。設計：フランク・O・ゲーリー)です。デザインも有名ですが、外装と建物間にできた半屋外空間は広大な公園に立つ立地も相まって、非常に居心地の良い空間です。コーヒーショップやベンチもあり、憩いの空間となっています。ちなみに空間の話から少しそれますが、構造が現しになっている階段室にはゲーリーが描いたであろう設計中のスケッチの変遷が20図近くあります。正直私にはその変遷の違いはなかなか読み取れないのですが、それをくみ取り設計したスタッフと形にした施工者・職人の皆様には頭が下がる思いです。ぜひ訪れた際は階段室ものぞいてみてください。穴場スポットです。



ルイ・ヴィトン美術館



階段室のゲーリーのスケッチ

JIA Convention Chiba 25

JIA建築家大会 2025 千葉

せんのちから

2025年11月7日[金] 10:30-17:30 (開場 10:00)
2025年11月8日[土] 10:00-17:30 (開場 9:30)

メイン会場. 千葉県文化会館

※11/7開催の一部の企画のみ「千葉大学あひのほな同窓会館」が会場になります。

主催: 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
運営: 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会
Web: <https://jia-convention.net/2025chiba/> [JIA建築家大会2025千葉公式ウェブサイト]

未来の建築・まちづくりを
市民や学生の
みなさんと考える
20のトークセッション



国道14号 (海岸通)



いよいよ千葉大会がはじまります！ 10/22(水)まで参加登録受付中！

JIA会員の方の大会へのご参加には参加登録が必要です。参加登録は最終的に10月22日まで延長されることになりました。こちらが最終の登録期限になります。大会へ参加される会員の方は必ず **大会登録** をしていただきますようお願いします！

大会参加登録、レセプションパーティー参加予約は、大会公式ウェブサイト内の大会参加登録専用サイトからお願いします。
ダイレクトに大会参加登録専用サイトにアクセスできますが、ぜひ右のQRコードから大会公式ウェブサイトへアクセスし、
さまざまなイベントの内容やタイムテーブルをご確認のうえ、大会参加登録専用サイトにお進みください。



大会公式ウェブサイトをご覧ください！

今回2日間の大会となりますが、その他、関連イベントが多数企画されておりますので、「大会公式ウェブサイト」をご覧ください、ぜひご参加ください。

JIA 建築家大会 2025 千葉公式ウェブサイト
<https://jia-convention.net/2025chiba/>

ACCESS MAP アクセスマップ



メイン会場

千葉県文化会館
〒260-8661
千葉県千葉市中央区市場町 11-2

サテライト会場

千葉大学亥鼻キャンパス内
あひのほな同窓会館
〒260-8670
千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1

レセプションパーティー会場

TKP ガーデンシティ千葉
〒260-0025
千葉県千葉市中央区間屋町 1-45
千葉ポートスクエア

(MEMO)
ホテルはJR千葉駅から富士見町エリアに多く、電車利用となるが海浜幕張駅近辺も利用可能範囲となる。また、飲食店は県庁からの通りの中央エリア、富士見町エリアに多数あり、栄町エリアは古くからの歓楽街。

モノレール市役所前駅	徒歩 10分	千葉県文化会館	徒歩 7分	あひのほな同窓会館
JR京葉線千葉みなと駅	徒歩 16分			
モノレール千葉みなと駅	徒歩 10分			
モノレール市役所前駅	徒歩 2分			
タクシー	7分			
バス、タクシー	8分			
JR千葉駅	徒歩 22分			
京成千葉中央駅	徒歩 20分			
本千葉駅	徒歩 16分			
モノレール県庁前駅	徒歩 17分			
モノレール県庁前駅	徒歩 11分			

レセプションパーティー前には送迎バスあり

TALK SESSIONS

トークセッション

22の多彩なトークセッションの中から4つをご紹介します。

ケアと建築



Yasunori Hasegawa



Daisuke Iida



Tachibana Higa



Asuka Yamada



Kentaro Yamazaki

S06

Community 地域社会・地域産業との繋がり

「登壇者」

飯田大輔
(社会福祉法人 福祉未来 理事長兼
企画・総務部長)

林 恭正
(建築家 / ArchTank / 福祉と建築 副代表)

比嘉武彦
(建築家 / kw-hg architects)

山崎健太郎
(建築家 / 山崎健太郎デザイン
ワークショップ / 工学院大学教授)

山田あすか
(建築計画研究者 / 東京電機大学教授)

2025.11.8 Sat. 14:15- JIA Convention Chiba 25

建築とテクノロジーの関係を 問い直す

——若手建築家が見据える設計の未来



Kaito Imai



Mika Araki



Nariaki Chigusa



Ai Kubota



Yohji Takano

S09

Innovation 未来社会に向けた新たな取り組み

「登壇者」

荒木美香
(構造物家 / Graph Studio /
関西学院大学専任教授)

久保田愛
(建築家 / 久保田愛一級
建築士事務所 / 東京大学
生産技術研究所今井研究室)

千種成顕
(建築家 / ICADA)

高野洋平
(建築家 / MARU, architecture /
千葉大学大学院工学研究科准教授)

今井公太郎
(建築家 / 東京大学生産技術研究所教授) 進行

2025.11.8 Sat. 10:00- JIA Convention Chiba 25

ここ何年か続く主要な建築賞における福祉施設の受賞は、福祉分野の建物に対する社会的関心を示しています。こうした受賞作品をはじめ、比較的若い世代の建築家たちは、上の世代があまり手がけてこなかった福祉関係の施設に積極的に関わっています。また福祉関係者の方々にも、若手の建築家との取り組みに意欲的なケースが見られます。比較的地味ともいえ、機能を優先するタイプの施設だと思われる福祉分野の建物が、なぜ今日注目されるのでしょうか。

そして昨今、福祉施設単独で閉じるのではなく、開かれたつくりとしたり、福祉的な用途とそれ以外のプログラムの複合により開かれたケアの場が生まれるなど、「ケアの社会化」といえる現象も広がっています。福祉施設が、地域コミュニティの拠点となる事例も見られます。人々が他者への思いやりを持ち、インクルーシブな社会を目指すその中で、「ケアと建築」の意味や可能性を議論する場としたいと思います。



認知症や介助が必要な高齢者が中心に過ごすリビング

建築は最も古く、かつ新しい技術であり、素材や構法の変遷を経て常に時代のテクノロジーと呼应してきました。近年、AIやBIM、3D CAD、3Dプリンタなどのデジタル技術が急速に進展し、設計と製造の在り方を刷新しています。変化が絶え間ないこの状況で、建築家は技術を単なる道具ではなく思考や創造を形づくる「環境」と捉え、その可能性と課題に向き合う必要があります。本セッションでは、デジタル技術の普及期にキャリアを築き、構造設計や教育に携わる若手建築家たちが登壇します。そして生成AIやBIMがもたらす思考の変容、設計と製造の新たな関係、技術と創造性の接点について多角的に議論し、建築デザインの未来を展望します。



オーゼティック (写真: YASHIRO PHOTO OFFICE)

JIA全国10支部合同企画 「注目の若手建築家による 建築討論」 S12

Education 次世代を担う建築家たち

2025.11.7 Fri. 10:30- JIA Convention Chiba 25

本企画は2023年からはじまった恒例企画で、日本建築家協会（JIA）の全国10支部から推薦された若手建築家が登壇します。それぞれの地域で活躍する若手建築家が存在します。自身の建築家像を確立するために、ひたすらに建築と向き合っているその姿は、孤独感との闘いと言えるかもしれません。そんな彼らがどのように今を生き、未来を切り開こうとしているのか。同じ境遇の若手建築家たちが、それぞれの地域で建築を創造する苦悩やプロセスを語り合うことで見えてくる未来像。全国の同じ志を持つ建築家のつながりや、同じ時代を生きる仲間ができる喜び。本企画は、そうした場をつくることを目的としています。さらに、「頼りになる建築家」とはどのような建築家像なのか、「頼りになる JIA」として信頼される組織になるために求めるものは何か、若い彼らの本音を探りながら、JIA の未来像についても考えます。

■ 10月23日（木）にはオンライントークセッションを行います。（M07）



JIA 建築家大会2023 常滑の時の若手建築家討論の様子

偉大な先輩建築家に学ぶ Vol.10 S20

大高正人一人と都市と建築

2025.11.7 Fri. 16:00- JIA Convention Chiba 25

NPO 建築文化継承機構は、建築家の設計文化財や思想、言説などを後世に継承していくことを目的とした社会貢献組織で、金沢工業大学建築アーカイヴス研究所とともに「JIA-KIT 建築アーカイヴス」の活動を行っています。今回は千葉県文化会館を設計された大高正人氏について学びます。大高正人氏はメタボリズムの建築家としては、楽観的な未来社会志向から距離を取りながら、広島基町高層住宅など、戦後の住環境改善と地域の再構築をテーマに設計活動をされていました。そして社会や人と建築の関係を築き、成熟した未来をつくるためには、行政との信頼関係をもとに公共建築を生み出すことが必要と、生まれ故郷福島県三春町に代表されるように、一つの地域に多くの建築作品を残し、それらが連携することで地域の生活環境を向上させる仕事をされたことが特徴です。「建築家大高正人」の思想を、研究者や間近で薫陶を受けた方のエピソードを通して次の世代に語り継ぎます。



みなとみらいのグランモール公園

TIMETABLE

タイムテーブル

千葉大会のトークセッションとイベントのタイムテーブルです！

2025年11月7日[金]

受付：千葉県文化会館
受付開始 9:30 開場 10:00 セッション開始 10:30
*会場の定員を超えた場合、ご入場できない可能性があることをご了承ください。
*なお、会場に変更があった場合は、随時更新します。

DAY 1

会場 部屋 (定員)	千葉大学		千葉県文化会館		
	あのはな同窓会館 (100席)	大ホール (1,724席)	小ホール (250席)	大練習室 (100～150席)	中練習室 (75～100席)
9:30					
	← 会場間の移動は徒歩7分です →				
10:00					
11:00		S17 10:30～12:00 私にとっての「横文彦」 富永譲 栗生明 宮崎浩 三谷徹 亀本ゲーリー 司会：鈴木弘樹	S12 10:30～12:00 JIA全国10支部合同企画 「注目の若手建築家 による建築討論」 福田幸子 葛島隆之 奥野八十八 矢野寿洋 平野公平 高橋俊志 斎藤信吾 田中宏幸 キノシタヒロシ 石川保 司会：浅井裕建		J01 10:30～12:00 「保存再生の今と これから」 修坂徹 金山真人 田島正陽 野沢伸也 他
12:00		C01 12:00～12:30 ミニコンサート 山田実紀子			
13:00		13:00～13:50 大会式典 開会宣言 開会挨拶 JIA会長挨拶 来賓挨拶 来賓紹介 名誉会員授与式 フェロー会員証授与式 他			
14:00		S01 14:10～15:40 歴史的意義ある建築の 保存と誇るべき日本の景観 ～価値ある建物の保存・ 利活用を県民と考える～ 県立図書館と大高建築～ 頼原澄子 山口俊浩 高橋直子 篠田智仁 森田敬介	S08 14:10～15:40 土と水と建築・都市 楠見晴重 藤井一至 山崎祐二 川島範久 常山未央	S18 14:10～15:40 International Presidents' Forum (IPF) Ar. Evelyn LEE Ar. Asae SUKHYANGA Ar. KIM Jaerok Ar. HAN Young-Keun 佐藤尚巳 竹馬大二	J02 14:10～15:40 JIA協力会員サミット ※JIA会員のみ
15:00					
16:00	S19 16:00～17:30 「建築家」って だれですか？ 古谷誠章 小野田泰明 佐藤尚巳 藤沼傑 司会：廣野正司	S20 16:00～17:30 偉大な先輩建築家に 学ぶVol.10 大高正人——人と 都市と建築 松隈洋 藤本昌也 中島直人 中尾明 仙田満	S13 16:00～17:30 第19回ヴェネチア・ ビエンナーレ国際建築展 「In-Between」から考える： 建築をたがやし情報を 育てる実践 伊藤亜紗 木内俊克 砂山太一 渡辺育	S21 16:00～17:30 《越境建築家》たちとの 対話 —「越境」が建築家に もたらすもの— 坂田泉 井本佐保里 後藤克史 山道祐人 早野洋介	S14 16:00～17:30 社会に発信する 建築家のメディア 実践を考える 小山光 澤秀俊 服部真史 和田信太郎 司会：会田友朗
17:00					

R01 | レセプションパーティー ※JIA会員のみ
会場：TKPガーデンシティ千葉 時間：18:00 受付開始 19:00 開会 21:00 閉会

EVENTS

イベント

多彩な大会関連イベント
が各団体や委員会などの
皆様によって自主企画と
してエントリーされ、開
催されます。

ワークショップ

W01 | 11月7日[金] まち歩き企画「まち歩き千葉の「たから」と「あら」」
W02 | 11月7日[金]、8日[土] 免震体験会～免震を体験できます～
W03 | 11月8日[土] 建築わくわくワークショップ

音楽

C01 | 11月7日[金] ミニコンサート 父大高正人との協演
12:00～12:30 山田実紀子
C02 | 11月8日[土] ミニコンサート 合唱を通して人々との
11:45～12:15 繋がりを創りたい 千葉県立千葉中学校・
千葉高等学校 合唱部

食

F01 | 11月7日[金] 千葉市の名店弁当
F02 | 11月8日[土] 千葉開府900年みんなのマルシェ

展示

E01 | 「住宅部会賞 10宅選」受賞作品展
E02 | “ケンバイ”のちから(建築家の信頼と社会的責任)
E03 | 千葉地域会活動と協力会
E04 | 協賛企業展示
E05 | 千葉文化の森を創った建築家大高正人

※本紙掲載の情報は2025年9月現在のものです。掲載内容は変更となる場合があります。
最新情報は大会公式ウェブサイトをご確認ください。

2025年11月8日[土]

受付:千葉県文化会館
受付開始 9:30 開場 9:30 セッション開始10:00
*会場の定員を超えた場合、ご入場できない可能性があります。ご了承ください。
*なお、会場に変更があった場合は、随時更新します。

DAY 2

会場 部屋 (定員)	千葉大学	千葉県文化会館			
	あのはな同窓会館 (100席)	大ホール (1,724席)	小ホール (250席)	大練習室 (100~150席)	中練習室 (75~100席)
9:30					
10:00		S02 10:00~11:30 千葉のまちの真ん中を デザインする ~開府900年から1000年へ に向けた持続可能な 賑わいづくりと人づくり~ 田中章 須藤雅之 田野恵 明里 持谷俊一 大木戸孝也 松浦健治郎 連健夫	S09 10:00~11:30 建築とテクノロジーの 関係を問い直す ——若手建築家が 見据える設計の未来 荒木美香 久保田愛 千種成顕 高野洋平 進行:今井公太郎	S15 10:00~11:30 これからの職能に 向けて、建築教育は どうあるべきか 岩元真明 高口洋人 田中友章 寺田真理子 吉良森子	J03 10:00~11:30 @joint全国学生会議
11:00					
12:00		C02 11:45~12:15 ミニコンサート 千葉県立 千葉中学校・千葉高等学校合唱部			
13:00		S04 12:30~14:00 都市と地方が混在する 千葉の食・文化の 現状と未来 ~農とまちを繋ぐコミュニティ から考える~ 山根正敬 岩山雅子 中村拓志 野村俊介 磯野智由	S10 12:30~14:00 気候変動や社会変容を 見据えた持続可能な 社会基盤の未来像 ~建築・ランドスケープの 新たな関係性を探る~ 長谷川浩己 西田司 津川恵理 永積紀子 進行:平賀達也	S05 12:30~14:00 地域づくりと建築家の 新たな活動 伊藤孝仁 栗生はるか 澤田圭司 田島則行 若林拓哉	S16 12:30~14:00 建築学生が考える 「これからの建築と社会」 @千葉 平田雅也 藤本千廣 西村風香 浅倉みなみ 三野樹絵 司会:水越英一郎
14:00					
15:00		S06 14:15~15:45 ケアと建築 飯田大輔 林恭正 比嘉武彦 山崎健太郎 山田あすか	S07 14:15~15:45 木材の非生産県における 地域木材活用のための 社会の仕組みづくり ~安定した木材生産にむけた 千葉県の林業と建築家の連携~ 福田彰 竹ノ内秀和 坂井こころ 小暮亮太 森田敬介 鈴木晋	S03 14:15~15:45 DOCOMOMO建築に 学ぶ創造性 —DOCOMOMO Japan 25年 安田幸一 渡邊研司 田所辰之助 鯉坂徹 進行:藤本竜也	S11 14:15~15:45 事前防災への取組と 今後の展望 相楽俊洋 田村裕美 真壁さおり 森岡茂夫 進行:水野敦
16:00		S22 16:00~17:30 〈オーバービュー・ セッション〉 せんのちからと 建築家のつながり 篠久美子 佐藤尚巳 平田晃久 森田祥子 進行:今村創平			
17:00					

トークセッションのテーマ分類:

地域の個性を活かす
Locality地域社会・地域産業との繋がり
Community未来社会に向けた新たな取り組み
Innovation次世代を担う建築家たち
Education世界の建築家・日本の建築家
Architect

JIAマンス

- M01 | 10月2日[木] 建築家、新しい家族をデザインする
M02 | 10月3日[金] JIAまちづくり会議
M03 | 10月9日[木] 注目の若手建築家による建築討論 1
M04 | 10月10日[金] OFF-GRID住宅:静戸の家を環境建築のMode理論で解く
—既存住宅にも応用可能な環境建築の設計と運用—
M05 | 10月16日[木] けんちく あいことば
M06 | 10月17日[金] “ケンバイ”のちから
(過去・継承から学ぶ 社会と建築家の責任)
M07 | 10月23日[木] 注目の若手建築家による建築討論 2

※一部実施済みのイベントも掲載しています。

エクスカーション

- X01 | 10月18日[土] 建築文化に触れる「醤油のまち 野田の記憶と記録」
講演・見学会
X02 | 11月6日[木] 設計者で行く、ふたつのJIA建築大賞 in 千葉
X03 | 11月6日[木] 醸造家の町 野田の歴史と近代建築
X04 | 11月9日[日] 佐原街並み見学会・講演会

レクリエーション ※JIA会員のみのみ

- R01 | 11月7日[金] レセプションパーティー TKPガーデンシティ千葉にて
18:00受付開始 19:00開会 21:00閉会
R02 | 11月9日[日] ゴルフコンペ第35回JIAフレンズカップ

「建築家大会2025千葉」の 成功に向けて！

—参加登録最後のお願い—



関東甲信越支部長
渡邊 太海

「建築家大会2025千葉」が迫ってきました。今年は趣向を変え2日間にわたり充実した22のトークセッションを用意しました。JIA関係者だけでなく市民や学生も参加でき、最新情報や知識を得るだけでなく、建築家のことや建築家の集まりであるJIAの存在を伝え、新たな交流やJIAの意義を感じてもらう大会です。

これまで2年間、実行委員会ははじめ千葉地域会等の関係者は多忙な中、仕事をやりくりし、お互い意見をぶつけ合い、企画内容の検討、会場設営、広報の方法、協賛金集めなど、大変な労力をかけて準備を進めてきました。

今回の大会のコンセプトは全国の支部から賛同と応援の声を多くいただいています。成功によって、JIA全国大会のモデルになることを心の支えに、関東甲信越支部全体で力を合わせていきたいと思います。

内容は決まりました。これからは1人でも多く参加者が増えることが大会の成功につながります。最近の全国大会参加者は下表の通りです。全国正会員の大会参加率は2割を切っています。また関東甲信越支部の正会員は弘前大会以降6%ほどしか参加していません。2018年東京大会は、正会員参加率は18.2%でした。今年は関東甲信支部正会員は4人に1人が参加し、400名となることを目指しています。他支部からも400名が参加し、準会員を含めて全体で登録者数1,000名が最終目標です。しかし、この原稿を書いている現時点(9月5日)で登録者は110名足らず。このままの推移だと、全国大会準備金だけでは工面できない恐れが出てきます。参加者が増えることで全国大会にかかる支出が縮減でき、次の全国大会へ繰り越したり、今後の支部予算に充てることができます。地域会や委員会に配分する活動費の捻出や、地域会ごとに行っている会計処理を支部に一元化する原資とすることが可能になってきます。「建築家大会2025千葉」

●全国大会登録者数

年	場所	登録者数 (人)	全国正会員 登録者数 (人)	全国 正会員数 (人)	全国正会員 との比率	関東甲信越 支部正会員 登録者数 (人)	関東甲信越 支部 正会員数 (人)	関東甲信越 支部正会員 との比率
2018	東京	831	629	3767	16.7%	302	1653	18.20%
2019	弘前	563	497	3675	13.5%	109	1614	6.70%
2022	沖縄	474	298	3355	8.9%	78	1558	5.10%
2023	常滑	574	451	3257	13.8%	82	1511	5.60%
2024	別府	680	398	3178	12.5%	80	1470	5.60%
2025	千葉	1000	800	3102	25.0%	400	1423	25%

目標！

の成功が支部の課題解決につながるのです。

私が支部長になって忘れてはならないと考えてきた課題の一つに建築家資格制度の推進があります。地域会訪問等でこの話の議論になると「ここをどこだと思っている？地域会だぞ！そんな話はよそでしてくれ！」「30年前と同じことをまた議論している。もう飽きたよ！」など厳しい言葉もいただきました。それでも議論し、前に進める必要があると私は思います。

全国大会では、建築家資格制度関連のトークセッションを予定しています(S19「建築家」ってどれですか？)、11月7日16時から)。日本建築士会連合会会長の古谷誠章氏、日本建築学会会長の小野田泰明氏、JIA会長の佐藤尚巳氏、海外の資格に詳しい元JIA関東甲信越支部長の藤沼傑氏が登壇し、建築家とはどんな人で海外ではどう見られているのか、日本での建築家の制度化の可能性など話していただきます。

建築関係団体間でも現在の日本の建築家資格制度について動き始めています。今年5月、建築五会^(注1)で「国際的で魅力ある次世代の建築職能人材に向けた提言」が取りまとめられ、その提言の第一として日本の建築士資格の国際的信用性を高めることがあげられました。また今年1月から日本建築士会連合会とJIAの両会長を中心に定期的に会議をもち、建築家の定義や統括設計建築士制度、登録建築家制度の今後の在り方を議論しています。その中で、建築家(Architect)の定義はUIA協定をもととすること、国際基準に適合する建築家(Architect)を両会で制度として作り上げることを確認しています。12月末を目標に方針を示す準備を進めています。このように建築家制度を団体の枠を超えて整理し、一般の人に建築家(Architect)とはこういう人ですと明示することは、私たち建築家のためではなく、社会のために必要なことだと思います。

「建築家大会2025千葉」は建築家について真正面から議論する貴重な機会になるはずです。

11月7日、8日は千葉でお会いしましょう。

注1：建築五会＝(一社)日本建築士事務所協会、(一社)日本建設業協会、(一社)日本建築学会、(公社)日本建築士会連合会、(公社)日本建築家協会

金曜の会

共感が想像するサステナブル建築の未来

—マリオ・クチネッラ氏の講演を振り返って—

金曜の会
今井祐太郎

2025年4月22日、金曜の会はNPO法人建築家教育推進機構と共催で、イタリアを代表する建築家の一人、マリオ・クチネッラ氏をお招きし、特別講演「CREATIVE EMPATHY (創造的な共感)」を開催しました。サステナビリティ建築の世界的な第一人者であり、現在開催中の大阪・関西万博のイタリア館の設計者としても知られるクチネッラ氏。本講演では、氏の哲学である「CREATIVE EMPATHY」が、持続可能な未来の建築をどう形づくるかについてご講演いただきました。講演の核心は、**地域の気候、文化、人々の生活**に深く寄り添う「CREATIVE EMPATHY」の概念です。この哲学について、具体的なプロジェクトを例に出しながら紹介されました。

気候に寄り添った事例

ガーナで設計された「ワン・エアポート・スクエア」という多目的ビルでは、各階のスラブを突出させてガラス面を日陰にし、モロッコの学生キャンパスでは、吸湿性の高いテラコッタ製の袖壁をファサードに無数に設けることで、地域の素材と自然の力で外皮を冷却するようにデザインされています。

文化に寄り添った事例

イタリア(ペッチョリ)のパラッツォ・センツァ・テンポは、既存の建物を残しながらつくり替え、その歴史と価値を活かしながら現代のニーズに合わせて再生しています。建物は、アート、デザイン、文化を共有し、人々が出会って交流できる場として生まれ変わりました。過去の建築物に対する共感と、現代の多様なライフスタイルへの配慮が融合した、持続可能な都市再生の好例です。

クレモナの病院は、病院とは患者にとって心身ともに回復を促す場であるべきだという理念に基づき、光を効果的に使った明るい雰囲気、患者の心にポジティブな影響を与えるようにデザインされています。自然素材や温かみのある色彩を使用することで、心安らぐ環境をつくり出しています。

人々の生活に寄り添った事例

イタリアのグアスタッラ幼稚園では、ピノキオの物語に出



講演風景



講演時のクチネッラ氏

てくるクジラの体内に入るシーンから着想を得て、あばら骨のような形状の木材が並んだ構造体がデザインされています。自然光と木の温かみがあふれる柔らかい空間は、子どもたちが自然との特別なつながりを感じ、好奇心と創造性を刺激する設計となっています。

今回は会場では英語のみの解説、オンラインではZoomの翻訳機能を利用した講演でしたが、私は「CREATIVE EMPATHY」を「創造的共感」とそのまま訳されていることに違和感を覚えました。さまざまな事例を聞く中で、エンパシーとは「寄り添い、創造すること」なのだと強く感じました。

クチネッラ氏の、環境、文化、人々に深く寄り添ったデザインは、単なる機能性を超えた美しさを持っています。また、その取り組みは、サステナビリティが地球環境だけでなく、人々の生活を豊かにすることを示唆していました。そうした深い共感に基づくデザインこそが、流行り廃りを超え、将来にわたって美しいと評価される建築を創造しうるのだと感じました。

金曜の会では、今後も魅力的な講師をお招きしてまいります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



ワン・エアポート・スクエア



学生キャンパス(モロッコ)



クレモナの病院



グアスタッラ幼稚園

渋谷地域会

「JIA 渋谷アーキプライズ2024」

—渋谷地域会の新たな試み—

渋谷地域会代表
高階澄人

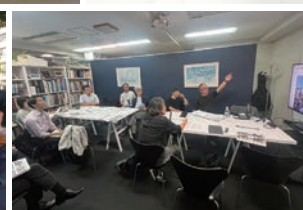
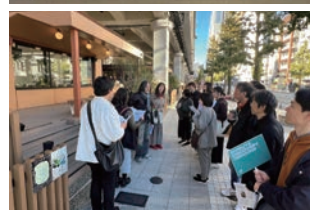
渋谷地域会は「学ぶ/体験する/交流する」をコンセプトに、人と情報の「交差点」となる地域会を目指し、「学ぶ会・語る会」「トレッキング/まち歩き」「CHIT-CHAT」を三本柱として毎月活動を行っています。本稿ではこれらのルーティンに加わった、渋谷地域会の新しい取り組みを紹介します。

「JIA 渋谷アーキプライズ2024」は、渋谷地域会が初めての試みとして2年をかけて企画・提案し、渋谷区の後援と「JIA 事業活動助成2023」を得て2024年度に実施した顕彰活動です。「渋谷らしさ」をテーマに、「楽しい」「気持ちの良い」場所、空間、建築、イベントなど、都市の中でのさまざまな「建築的な取り組み」について、いわば「推し」を幅広く募集し、建築家の視点で数点を選び「都市の魅力」を敏感に捉えた推薦者を表彰する（同時にその対象の所有者や管理者の方々、また設計者や施工者にも敬意を表する）ものです。

今回は34の応募があり、その内容は誰もが認めるような渋谷のアイコンと呼べる建築や場所、長く継承される伝統行事、新しい画期的な建築、若い世代による元気な創作物、思い出の場所、など予想を超えて多岐にわたるものでした。推薦対象・受賞者の選定にあたっては、まず地域会メンバー全員での全応募レビューによりコメントを集め、次に「トレッキング/まち歩き」コースに盛り込んでおむね全作品の現地見学を行い、最後は審査チームによる議論の中で総合的な観点から決定しました。

今回は、明治神宮の参道に沿った首都高速道路高架下を、子どもたちを中心に世代を超えた多くの人々が集う場所として楽しく再生した「駒テラス西参道」と、渋谷の特殊な地形による都市交通施設を、未来に向けて美しく造り変えた「東京メトロ銀座線渋谷駅」の2点を受賞の対象として選びました。渋谷区役所で授賞式を行い、受賞者には区内の廃材を再利用してアーティストにデザインを依頼したオブジェと賞状を送りました。また、全ての応募を『ALL 34 ENTRIES』という小冊子にまとめました。

この取り組みは渋谷というまちについて一般の多くの方々に「問いかけをする」ものです。自分たちの暮らす、働く、属するまちについての想いやプライドを尋ねるも



左上：渋谷区役所で行われた授賞式。右上：全応募をまとめた小冊子『ALL 34 ENTRIES』（渋谷地域会サイトで閲覧可能 https://jia-shibuya.org/pdf/20250326_SAP_report.pdf）。左下：トレッキングでの現地見学。右下：全応募レビュー

のです。「問いかけへの返答」である応募理由には心を打たれるものも多く、込められた思いに専門家としてきちんと応えたいと私たちは考え、『ALL 34 ENTRIES』では全ての応募に審査過程の意見や推薦対象に関する解説や感想などを審査員コメントとして添えています。審査チームの多くのエネルギーと時間を費やすことになったこの作業の中で、冒頭に示した私たちの3つのルーティン活動がこの賞のコンセプトの源であったことに気づきました。学ぶこと、まちを歩くこと、会の内外にわたり交流すること、の積み重ねの延長に、今回はプライズという形で積極的な「問いかけ」をして、応募者から真剣な「返答」を得て、専門家として「応答」ができたことが、なよりの成果であると考えています。

渋谷区には高い評価と継続した後援をいただき、現在「JIA 渋谷アーキプライズ2025」が開催中です。今年は企業協賛も得て、渋谷のローカルメディアと協働し認知度を上げ応募総数を増やすこと、授賞式に併せて関係者が一堂に会した対話の機会を設けることなどを新たな目標としています。10月30日まで、下記QRコードから応募できます。多くの会員の参加をお待ちしています。



◀「JIA 渋谷アーキプライズ2025」
こちらから応募ください

再生部会セミナー・レポート

イタリアの旧工場地区再生と
産業遺産の保存活用再生部会 前部会長
柳沢伸也

関東甲信越支部の再生部会では、既存ストック保存活用に関する先進事例を学ぶ公開セミナーを継続的に開催しています。2025年度第1回となる4月18日には、「イタリアの旧工場地区再生と産業遺産の保存活用」をテーマにセミナーを開催しました。今回はWebサイト「建築リノベーションアーカイブ」開設2周年を記念して筆者が講師を務めました。私とイタリアとの関わりは、大学時代にカルロ・スカルパの建築を訪ねた旅から始まりました。その後、ミラノ工科大学で保存活用に関する理論を学び、現地設計事務所で3年間の実務経験を経て、帰国後も約20年にわたり、建築の保存活用と都市再生に関する研究を続けています。当日は50名を超えるご参加をいただき、このテーマへの関心の高さがうかがえました。

産業建築の再評価と都市再生の潮流

近年、ヨーロッパでは衰退した工場地区に残る産業建築が再評価され、その保存活用による都市再生が積極的に進められています。背景には、1990年代にEUが掲げた都市間競争力の強化や持続可能な都市開発への転換があります。脱工業化に伴い、空洞化した工場地区の再生や交通インフラの整備に加えて、地域固有の歴史や文化を活かした都市づくりが求められるようになりました。イタリアの各都市もこの潮流に呼応し、多様な再生プロジェクトが展開されています。

なぜイタリアで「産業建築」を保存するのか？

歴史的建築の宝庫と言えるイタリアで、なぜ産業建築も保存の対象となるのでしょうか。その背景には産業建築が持つ歴史的・文化的価値の再認識があります。筆者がイタリア国内の工場地区再生61事例を調査した結果、産業建築の痕跡を意識的に残しながら用途転換を図る手法が多く見られました。廃墟だった砂糖工場を音響の良い音楽ホールに再生した事例(右写真)や、食肉処理場を大学施設に転用した事例、さらには造船所をアート展示空間に活用した事例など、ドラスティックに生まれ変わった産業建築が数多くありました。これらの施設は、都市空間の再構築や地域活性化の核となり、歴史的記憶を継承し、地域住民のコモン意識を醸成する場として機能しています。

工場跡地は都市の課題を解決する空間資源

20世紀前半に整備された工場地区の多くは、交通利便性の高い市街地周縁部に立地しており、第二次大戦後の都市拡大に伴い、市街地に取り込まれてきました。衰退後の工場跡地は、広大でポテンシャルのある都市の空間資源として注目されるようになります。多くの再生事例では、観光施設よりも地域住民の生活の質向上を目指す転用が進められ、文化施設、商業施設、運動施設、公園など、日常に根ざした複合的な施設整備が多く、歴史的な中心市街地に暮らす住民の住環境改善にも寄与しています。

コモン意識と地域の歴史を再構築する

産業建築には、地域の景観や労働文化、社会経済の記憶が刻まれています。これらを人々に開かれた施設として再生することで、日常的に使われ、親しまれる場となり、地域の歴史への理解が深まります。そうしたプロセスを通じて住民同士のつながりやコモン意識が育まれ、過去と現在を結ぶ新たな都市の核が形成されつつあるのです。

持続可能な都市再生モデルとしての可能性

ただし、旧工場地区の再生には課題もあります。調査対象の約4割はブラウンフィールド(汚染によって損なわれている遊休不動産)に該当し、環境対策に多くの費用と時間を要しました。汚染は周辺住民の生活にも影響するため、公的支援やイメージ刷新の工夫が不可欠です。だからこそ、持続可能性の視点が求められます。再生事例では、再生材の活用や省エネ設備の導入といった環境配慮に加え、住宅・商業・公共・レクリエーションなど多用途を組み合わせることで、多様なニーズに対応する都市空間が生み出されています。

旧工場地区の再生は、「記憶を受け継ぎながら未来を形作る」都市再生のモデルと言えます。残す価値がないと見過ごされた建物の中にも、再生によって新たな可能性が芽生えることを再認識しました。今こそ、こうした潜

在力を引き出す建築家の技能が求められています。



砂糖工場を転用したバガニーニ音楽堂。1899年から1968年まで稼働し、2001年改修。設計はレンゾ・ピアノ。(筆者撮影)

住宅部会

住宅部会50周年を迎え



住宅部会 部会長
慶野正司

「JIA関東甲信越支部 住宅部会」は、その前身が1975年に発足して以来、本年で50周年を迎えました。その間、大変多くの諸先輩が多彩な設計活動を意欲的に展開し、そのなかでも市民に最も身近である「住宅建築」も数多く世に生み出されてきました。時代の変遷と共に求められるライフスタイル、住宅像も大きく様変わりしてきているなか、私たち住宅部会はJIAの理念のもと、常に美しく住みやすい環境と持続可能な社会、創造性豊かな住文化の構築に寄与することを目的に活動しています。

部会員はJIA会員である「正会員」、JIA非会員の「研究会員」、そして「協力会員」で構成され、本年度スタート時点では総勢128名の多世代の建築家が同じ目的のもと活動しています。今日まで、それぞれのステージで社会に発信し続けてきた先輩建築家はもちろん、現役会員も創造性豊かな住宅づくりに努めているメンバーばかりです。

部会の活動は、毎月「住宅部会の日」を設け、研修系事業（セミナー、講演会など）、体験系事業（見学会など）、交流系事業（懇談会など）を中心に企画されています。なかでも当部会の目玉事業として2018年より部会員設計の住宅作品を対象として顕彰する「住宅部会賞10宅選」は多くの応募のもと毎年開催されています。

応募者各位の作品発表から審査に至るまでの直球の建築談義は、部会ならではの醍醐味といえます。また、応募は部会員であることを条件としているため、JIA非会員も部会入会することで参加が可能となり、毎年若い建築家たちも意欲的に挑戦しています。将来のJIA入会のアプローチ事業の一つとなることを期待しています。



第7回住宅部会賞2024受賞者

ここで、本年度の今までの活動をご紹介します。

5月部会の日

「大谷石を巡るツアー」見学会

大谷石の街（栃木県宇都宮市）にある大谷石採石場跡、現役採石場の見学から始まり、大谷石建築を巡り地域と共に発展してきた大谷石文化に触れるツアー。

6月部会の日

「建築動画のいろは—その1」レクチャー

今や伝達手段として動画が高効果であることは周知であり、その基礎知識に触れ動画作成に挑戦するための「いろは」のレクチャー。

7月部会の日

「住まうこと・つくること—建築家の自邸」見学会+納涼会

一度は見学したかった室伏次郎邸「北嶺町の家」と、2024住宅部会賞室伏次郎賞受賞作品 五十嵐理人邸「家の躯体」、世代を超えた2人の建築家の住宅建築にかける根っ子の思想にふれる見学会。

8月部会の日

「建築動画のいろは—その2」発表会

「その1」でレクチャーいただいた会員各位が動画作成した作品を発表し、建築空間の発信の可能性について考える。

以上を開催してきました。そして、これからも多くの「部会の日」企画が進んでいます。

さらに本年度は前述の通り部会50周年を迎え、多様なメモリアル企画として記念誌の発行や部会OBを交えての交流会などなど、先人の想いに触れ過去を学びながらこれからのJIA部会の可能性、住宅建築の可能性について考える1年になることを目指しています。

私たち建築家は、その時代に呼応した思慮のものとの設計が求められることは自明ながら、一方では「人々が住まう」ということの深層にはそれぞれ普遍的な想いがあり、これからも大切にして設計活動に活かしていくことも建築家の使命と捉え活動しています。

JIA会員の皆様、ぜひ一度「住宅部会の日」を覗いてみてください。

住宅部会 HP ▶

<https://www.jia-kanto.org/jutaku/>



こんなものは！



室伏次郎

1963～1970年 坂倉準三建築研究所 在籍

1963年に坂倉準三建築研究所に入所した。日本は戦後復興期をへて高度経済成長の時代となり、入所の翌年は東京オリンピックの年であった。坂倉準三建築研究所(以下坂倉アトリエ)は50年代末から渋谷の都市計画スケールの仕事を種々完成させ引き続き超多忙な状況にあった。

卒業をひかえて就職先を考えるにあたり、ル・コルビュジェの愛弟子で世界的に知られた建築家坂倉準三のアトリエを目指した。学科助手に坂倉アトリエに在籍する先輩を紹介いただき、坂倉先生との面接をお願いし、無事にその日を迎えることができた。

面談当日はポートフォリオと課題の集合住宅計画の作品を持参した。面談に臨むと先輩の方がいきなり「こんなものを持ってきて！……」と私の目の前で作品をクサし始めた。当然応援をしてくれていると思っていた私は面食らったが、そこで坂倉先生は「いや、きみはそんなことを言うが、なかなかおもしろい、いいじゃないか」とおっしゃった。私はそれで安堵したのだが、後でわかったことだがこれには先輩に戦略有りであった。坂倉さんは設計にあたり自ら初期のイメージを語ることをせず、スタッフに白紙から任せてアイデアを出させ、それをベースに議論に入る方法をとっていた。スタッフとのディスカッションで「こんなものは！」と言ってチェックし、徐々に自分の思いをスタッフに浸透させていく進め方であることを熟知する先輩が、先回りしてセリフを取ってしまったことであったと思われた。

春に面接をし、秋になっても返事がないので心配のあまりアトリエに確かめに伺った。チーフの方が「何だお前知らないのか！入所OKが出たから可能な限り早く仕事に来い」と言われた。「卒業式が終わり次第参ります！」と言ってアトリエを後にしたが、帰り道は天にも昇るような嬉しさを噛み締めたものだった。「これでいよいよ自分にとって望む場所で仕事をして給料がもらえる！こんな嬉しいことがあるか！」という思いであった。

翌年春にアトリエに出勤した。場所は赤坂の閑静な住宅地の中で、建物は昔オーストリア公使邸であったという古い木造の洋館であった。グレーの外壁に白い窓枠で、入り口のキャノピーだけは坂倉アトリエがデザインした

反り返った赤い屋根を白い紡錘型の柱が支えている、なんとも洒落た美しい建物であった。玄関ホールに入ると左手の壁にピカソの「ゲルニカ」の大きなコピーが掛けられていた。正面の階段の踊り場には坂倉さんがコルビュジェのアトリエ所員時代に描いたパースの額が掛けられていた。天井は白、壁はコルビュジェがよく使う若葉色、ドアは真っ赤やチャコールグレーであった。普段自分が出会っている空間とは全く違うハッとするように新鮮な感覚を感じる空間で、「流石に一流の建築家の居場所はちがうな～」という思いで、自分はいい場所に來たと実感した。

入所2年目に神奈川県立近代美術館新館増築の計画が起き、若い所員によるミニコンペが行われ、幸い私の提案が認められて初めての主任担当者となった。

ある時、その新館建設中の現場視察に訪れた坂倉さんから、本館の池に面したバルコニーで思いがけず貴重なコメントをいただく機会が訪れた。「室伏君、僕は意図的に日本的なものを作ろうと思って計画したことはないのです。日本に生まれて日本語で物を考え日本で教育を受けてきた自分から生まれ出るものは、外国人から見れば自ずと日本的なものを備えた空間として捉えられるものなのです。それよりももっとも大事なことはその場所の性格を読み、その環境に相応しい建築の在り方を発見することなのですよ」とモノローグのように話された。

八幡宮神社境内の日本の風土らしい景観の中でそれに相応しいモダニズムの名建築を設計した本人の、もっとも有名な、反射光で池の波紋が揺らめく光を美しく天井に描いている、そのバルコニーでの思いがけない言葉に、若輩の私は何も答えることはできず、逆光にきらめいている水面を黙って見つめるばかりであった。

既成の評価軸に沿って設計目標を定めることはクリエイティブな態度ではないということだ。坂倉さんが常に話されていた「設計とは改革の提案を世に問うこと、建築家の役割とはその環境に最も相応しい建築の在り方を発見すること、人間のための建築とは人々に空間体験を通じて、生きる喜びといっても良い楽しさと希望をもたらすものである」と共に、坂倉アトリエで学んだ最も大切なこととして自分の建築観を作ってきた言葉となった。

宮崎秀生氏に聞く

空間の音響をより良くする提案を



今回お話をうかがったのは、ヤマハの空間音響グループで室内空間の音響設計をされている音響コンサルタントの宮崎秀生さん。コンサートホールや劇場など、エンジニアとして建築家と協働する機会も多い宮崎さんに、音響設計の仕事についてお話をいただきました。

——音響設計に携わるきっかけからお聞かせください。

私は東京大学の建築学科出身で、大学院では東大生産技術研究所の橘秀樹先生の研究室で音響を学びました。入学当時はF1が全盛期でしたから車関係に進もうかなくらいに思っていました。ただ、昔からバイオリンをやっていたこともあり、ホールをつくってみたいと思うようになり、建築学科に入りました。

卒業後はヤマハに入社し、音響設計をする部署に所属しています。途中、スピーカーのシミュレーションソフトの開発に携わったこともありますが、現在は音響コンサルタントとして音響設計の仕事をしています。

——音響設計とはどのような仕事なのでしょう。

ホールや劇場の設計時に、その空間の音響をより良くするために、これまでの経験やシミュレーション技術を用いて空間のつくり方をアドバイスしています。例えば、空間の大きさによって音響が変わるため、豊かな響きを得るために天井高をできるだけ確保して空間のボリュームを大きくしたり、逆に天井高を抑えて音量感を出すことを提案したりもします。プロポーザルの段階から参加することもあります。私が関わる段階では建築家の案で空間の規模は決まっていることがほとんどです。その場合は、内装壁の拡散形状を検討したり、浮雲や音響底と呼ばれる音響反射板を取り付けたりすることで、反射音をコントロールしながら音環境が良くなるように設計します。

香山建築研究所と一緒につくった大分県の「竹田市総合文化ホール グランツたけた」（2018年）は、700席という席数に対して空間が大きく、とても残響が豊かなホールで音楽演奏に適した音響です。一方で、残響時間が長すぎると楽器などの音がぼやけてしまうこともあるため、側壁の形状を工夫して反射音をコントロールしています。また講演会などのためには響きを抑えるために吸音カーテンも備えています。

逆に響きを豊かに変えられるのがAFC（Active Field Control）というヤマハの残響支援技術で、建築ではなく、

マイクとスピーカーで自然に残響を変化させることができます。AFCを導入すると、残響時間の短いホールでも、2,000席のホールと同じくらいの残響時間にすることができます。この技術も含めて、その空間に合った音環境の設計を提案しています。

——AFCについてもう少し詳しく教えてください。

最近はいマーシブ（＝没入）という言葉がよく使われていますが、音響の世界もイマーシブシステムというものが全盛期で、スピーカーメーカー各社が売り出しています。多くのスピーカーで囲うことで、音像と言われる観客が感じる音源のイメージを制御して、楽器音や声などの再生音を空間に配置したり動かしたりすることができるシステムです。

一方、AFCは1985年頃に開発されたシステムで、音場と言われる、音が響いている空間そのものをマイクとスピーカーでコントロールします。音響設計は空間から返ってくる反射音の構造を設計するのですが、いわゆる残響となる後期の反射音だけでなく、音源からの直接音の後に早い段階に届く初期反射音がとても重要で、この両者のバランスを考えながら設計を進めます。それは先ほどお話しした「グランツたけた」のように、建築的には天井高や側壁の形状、反射面の角度などでコントロールするのですが、限界があるため、それをもっと極端にできるようにしたのがAFCです。初期反射を追加したり、響きのエネルギーを追加したりすることで、ホールそのものの音場を別の音場にしてあげるような考え方です。この技術を備えている他のメーカーのシステムもありますが、音場をコントロールすることを専門としている音響設計チームが開発したシステムという点が、他と違う部分だと思っています。東京国際フォーラムのホールにも残響感や音量感を増すためにこのシステムが入っています。最近はこちらに音像を制御する機能もAFCに追加されました。音響設計の技術とAFCの技術の両方のメリットを活かしながら音空間を設計しています。

——スピーカーでコントロールできるようになると、建築空間としてできることは何でしょう。

空間は吸音されているブラックボックスで、響きは音響設備でコントロールするつくり方も増えてきています。また自宅で簡単にイマーシブ環境で演奏を聴くこともできます。ただ、ホールにコンサートを聴きに行く文化は無いかならないと思います。やはり会場に行き、演奏者や観客の皆さんと同じ音空間を共有することの価値は大きいですし、リアルな演奏を聴くことに価値を持たせないと演奏家もいなくなってしまう。聴く場所によって違いがあるのも面白いので。日本はどのホールも丁寧につくられています。どんな小さな街に行っても良いホールがありますね。私はコンサートホールに行ったらリアルな音を聴き、その後に飲みながら感想を話す時間が好きです。

——良い音とはどのようなものを指すのか、宮崎さんの中で基準があるのでしょうか。

まずは静かな空間にして、残響時間を何秒にするとういう音環境になるという、誰にでもイメージしやすい指針があります。そこから先は設計者の感性であったり、どこまで拘るかという世界です。私はそれでいいと思っています。設計者や施主に、「響きが素晴らしいね」と言ってほしいのです。なので、何が素晴らしいのかをきちんと表現して、納得してもらうのが私の仕事だと思っています。その空間の用途やその人が何を求めているかを感じながら、言葉を選んで説明することが大切です。

私はヤマハに入社後、2002年の1年間はアメリカのある音響のコンサル会社に出向していました。当社と一緒に東京国際フォーラムの音響設計を担当した会社です。その時マンハッタンに住んでいたのも、毎夜毎夜カーネギーホールやメトロポリタンなどに足を運び、オペラやコンサートを1年間で100回以上聴きに行きました。その時に、自分なりに良い音を感じたり、音を評価するスケールができたのです。これは自分にとって大きな財産です。

——携わったホールで印象に残っているものは何ですか。

音響設計において初期反射のコントロールはすごく重要なのですが、それを自分なりに習得できたのはヤマハ銀座店の8階にある「ヤマハホール」(2010年)の設計です。333席のホールで、幅が狭いため横からの反射音がとても強いのです。強すぎると音像がモヤッとしてうるさいホールになってしまうのですが、そこをうまく制御することができました。実験や音響シミュレーションを何パターンも行い、こうすると音の感覚はこう変わるということを理解しながら設計できました。舞台床の木材には、ヤマハの楽器部門が持っている、木をエイジングさせる



自動演奏ピアノによる舞台床モックアップを用いた試験実験



ヤマハホール内観

技術を用いました。エイジングされた木を使うと床の振動特性が変わり、楽器の音が変わるのです。とくにピアノやチェロなど足が床に付いている楽器は全然違います。

ホールは主階席をどう良くするかがポイントの1つですが、1,500席ほどのホールで主階席をきちんと設計できたのは「久留米シティプラザ」(2016年)です。ここではサイドバルコニー席を多層化することで良い響きをつくり出しました。それから、現在建設中の丸亀市の新市民会館のホールは、バルコニー席が壁から離して浮かんだようなつくりになっています。これはもうすぐ完成しますが面白いホールになりそうです。

——音響コンサルタントとして普段から意識されていることはありますか。

社内の若いメンバーには「感性を磨け」とよく言っています。美味しいものを食べたり、美しいものを見に行ったり、いい音を聴くなど、感動するような体験をしてほしいです。それを自分でも実践するようにしています。

2003年に初めてオーストリアのザルツブルク音楽祭に行きました。とても有名な音楽祭なのですが、Tシャツにジーパンのようなラフな格好で行ってしまっ。暑い時期でもみんなタキシードやドレスで来ていて、その雰囲気圧迫されました。それからほぼ毎年行っています。コロナ以降行っていないので再開したいです。

一緒に仕事をする建築家の方も音楽好きな方が多く、そういう方と話がしたくて普段から演奏会に足を運んでいるような部分もあります。音楽の話をするのが楽しみで、相手と感動を共有したいという思いが強いのです。楽しく仕事ができていることを嬉しく思っています。

——貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2025年7月7日 建築家クラブにて

聞き手：渡辺 猛・小倉直幸・会田友朗・伊藤綾香(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

宮崎 秀生 (みやざき ひでお)

音響コンサルタント

1996年東京大学工学部建築学科卒、1998年同大学院修士課程修了。同年ヤマハ株式会社入社。入社後は室内音響の研究に携わり、コンサルタントとして約100件の音響設計プロジェクトやヤマハ独自の空間の音響を制御する技術である音場支援システムの設計、調整に携わる。担当した主な音響デザインプロジェクト：福岡市民ホール(2024年)、あきた芸術劇場ミルハス(2022年)、久留米シティプラザ(2016年)など。

ロマンチック街道のまちづくり



水島 信

まちづくりということ

最もドイツ的とされるロマンチック街道を見て、美しい街並みをつくるのが街づくりの目的と考えるのは、短絡的で、しかも大きな勘違いです。建物の高さが揃えられているが故に街並みに統一性があるって美しいと評価されますが、昔の建物がほとんどこの高さであるのは、体の限界に合わせて建設されたからと考えられます。

ドイツでは、4階建て以上にはエレベーター設置が義務付けられていますから、4階以上を階段で上るのは苦勞を伴うということです。個人的な体験では6階までが限界です。つまり、6階以上を階段で上るのは困難という人体能力に合わせて建設されたから、建物の高さが揃ったのではないのか。すなわち、街並みを美しくするために高さを揃えるのではなく、結果として揃ったというのが正確ではなかろうかと個人的には思っています。

そこから、教会より高い建物を建てないという不文律は、単に宗教への尊厳という理由だけではなく、街中のどこからでも教会が見えることで、住民の共同体へのアイデンティティーに作用することや、教会の塔から城壁の外側を遠望するのに視界を遮るものがないということが共同体の防衛に有効であるということなどを鑑みると、高さが揃う街並みに、「美しさ」などという生活を保護するのに直接関連しない根拠などは皆無であると考えています。学術的根拠はなく、単なる実務的思い付きです。

思い付きでいえば、壁面を揃えるのは街区景観を整えるためと解釈されますが、道路幅は両側壁面間隔の最狭部分で決まりますから、壁面が揃っていない他の広い部

分は“余り”でしかなく、この無駄を省くためには街区の壁面を揃えるのが効率的という理由によるのではないかとすることができます。窓に花が並ぶのは観光客には綺麗な飾りですが、もともとは虫除けです。看板を同質のものにするのは、大きさも形も自己主張の強い看板が並べば看板で街路が埋まり、読みとるのが困難になって本来の機能を失い、加えて、大きさによっては落下の危険性も生じるからです。したがって、都市内の限られた土地を有効に利用する工夫や、自分の権利を確保するためには秩序を守るのが最善と認識することで、欠陥と無駄を取り除きながら居住空間の質を向上させた結果によって、街並みが改善され、景観が統一され、街が美しくなったのだと考えるのが順当ではなかろうかと思っています。

ローテンブルク：住民生活優先のまちづくり

日本では、にぎわいによって、つまり人を集めることで街を活性化させることがまちづくりと考えられていますが、これも大きな勘違いです。何故なら、ここで集められるのはその町の住民ではなく、他の町の人々で、観光に携わる商売には有効ですが、その他の住民には、塵や汚水の処理などで、町のインフラの許容量を超えることによる財政負担の要因でしかないからです。

「まちづくり」はそこに住む人々のために行われるべきというのに好例なのは、ローテンブルクです。都市建設局で聞いた話を基にしますと、戦時中に、戦災を想定して伝統記念物をすべて防空壕に避難させ、戦後にそれらを用いて、廃墟の町を中世の本来の街並みに復元させたそうです。日本であればこれ幸いと新しい町に建設したでしょう。戦前からこの町を訪れる人は少なくなく、戦後の復興が安定期に入った頃からも観光客が再びこの町を訪れるようになります。元手のかからない観光事業は復興途上の町にはこの上もない収入源になりました。しかし、それが街の荒廃化をもたらすことになったのです。観光客の車が路地裏まで入り、勝手に駐車し、騒音と交通障害で住民の生活環境を侵害します。生活必需品を販売して住民の暮らしを支えていた店が、お土産屋という日常生活とは無縁の機能に変化して、生活が不便に



Rothenburg ob der Tauberの塔の上から城壁の外側が眺められる街並み

なります。住宅が宿泊施設に代わって、電気、ガス、上下水道の使用量とごみの量が急激に増加し、周辺の住環境が劣悪になってしまいます。

観光だけに目を向けて街づくりを行ったら「町が生活する場でなくなってしまう」ということに、住民も自治体も気が付きます。そして、「町というのは住民が快適に生活できて初めて町と言える」という至極もつともなまちづくりを始めます。基本柱は、観光客相手の商売にはなるが住民の日常生活を直接支えるものでない、飲食店やお土産屋などの新たな開店を抑制することと、生活を支援する目的以外の街の中の交通を規制することでした。具体的には、店舗以外の建物の店舗への改築は不可能で、店舗であったのを店舗に改築するのは可能ですが、築かれてきた街並みを保つことが最優先で、ファストフードの店でも街の景観を損なわない形態にすることが許可条件です。そして、観光用の車が街の中に入らないように城壁の外に集中駐車場を設けます。訪問者はそこに車を止めて、街の中を歩くようになりました。必要な車以外が入ってこないで、歩行者にとっても街は快適な空間になり、ここを訪れる人たちにも当たり前のこととして受け入れられています。そのせいでしょうが、観光客は以前に劣らず多くなっている、という街づくりの方針とは(良い意味で)反対の結果になっています。

フュッセン：住民主導のまちづくり

ロマンチック街道の最南端に位置する町フュッセンの街づくりは、民主主義の基本形で実務的な例といえることができます。小さいにもかかわらず、この町の中心街は南下してきた交通量の多い街道が中心を北から南へ貫通して、中程の地点で西と南に分岐し、南側に城館、東側に大きな街区、そして西側に小さな街区と三分しています。この西側の街区で、1960年代後半から70年代前半にかけて、建物の老朽化が進み、解体もあり、街並みにまとまりを欠くようになっていました。自治体は当初、この西側区域だけを対象としたB-プラン(Bebauungsplan＝建設履行図：日本の地区計画詳細図)を作成して市民に公聴します。公聴会に参加できるのは計画対象区域の市民だけではなく、だれでも参加できます。それは、町の一区域で起きる問題は、発生した区域だけに影響を与えるのではなく、町全体に影響を及ぼすからです。一部市民の生活権にかかわる問題は、共同体が存在するためには全体の問題なのです。直接影響を受ける市民にしかその事柄に対しての公訴権がないという「原告不適格」は、市民の権利を差別して、非民主的なものです。

このことを証明するように、市民は「街全体の将来像

が明確でなければ、限られた一地区に関する議論は不可能である」という明確な根拠をもって反論し、自治体は街全体の将来へ向けての街づくり展望を作成しなければならぬ事態に陥ります。結果は、中世の特徴を持つ建造物を残しながら、新しい時代の生活に適應できるような保全と修復をするという、二律背反の脈絡を保ちながらの政策の計画でした。官は民の参加がなければ行政の案も砂上の楼閣にしかありませんので、市民の同意を得るために、古い街並みを可能な限り保全しながら快適な住空間に改善するという案を提示し直しました。短い期間で仕上げなくてはならなかったと自重気味に自治体は反省しますが、逆にそれ故に対応が早く、短い間に施策が取られたということで、大きな問題に発展する前に対抗策が執られたという模範的な事例と思えます。古い市街地を歩行者優先空間にして車の弊害を取り除き、容積率の格差を是正して採光、通風のための空地を確保するといった、快適な空間が街の中に創り出されました。

まちづくりの基本

まちというのは、そこで住民が生活を営むことで初めて成立します。それには、都市環境が住民生活のためには良好でなければなりません。ローテンブルクにしてもフュッセンにしても、千年以上も前の中世から培われてきた環境の中で、近代化に対応できる改築はいろいろな要素に絡んで困難であるにもかかわらず、あるいはそれ故かもしれませんが、古いものを残す不便さを承知で、その生活文化を継承してきた街並みの保全に力を入れ、「如何にしたら住民にとって街が住み良くなるか」ということを基本とした街づくりの手法を、明確に示してくれます。



人間優先の街づくり後のFüssenの街並み

水島 信 (みずしま まこと)

ドイツ・バイエルン州建築家協会登録建築家

1947年新潟市生まれ。1966年新潟高校卒業。1970年芝浦工業大学建築学科卒業。渡欧。ウィーン、ミュンヘンにて就業。1981年ミュンヘン技術大学建築学部卒業。Diplom Ingeniuerの称号取得。ミュンヘン、東京で就業。1990年ドイツ・バイエルン州建築家協会に登録、Architekt称号取得。独立、ドイツと日本で建築および都市計画を行う。

封印されていた原点



相坂研介

1996年東京大学工学部建築学科卒業

捨てた卒業設計

「卒業設計は終わらなかった。だから翌日に捨てた」。講師として何度も学生にそう言ってきた気がするし、自分でもこれまでそう信じて疑わなかった。でも今回寄稿を頼まれ恐る恐る納戸を探したら、手描きインキングでB2台紙に切り貼りされた、ほろ苦い12枚が出てきた。模型写真は30年を経て初めてスキャンしたものだ。



卒業設計「second life in GINZA ～余生は銀座で～」模型写真

学部4年の8月、院試の勉強中に安藤忠雄建築研究所へアルバイトに行くと、帰りに採用を打診されたが、卒業設計もバッチリ決めて、手土産にするつもりだった。

真面目だが無謀な計画

見た目の軽さに反して、考えは生真面目であった(今もだが)私は、建築が今後の少子高齢社会の課題解決の一助となりうるテーマを、当然のように探し、掲げた。当初は普遍的な提案を目指して杉並や世田谷の住宅街を敷地に定めたが、中間講評だったか「普遍的な敷地などないぞ」という指摘を受け、急遽敷地を銀座に変えた。昭和初期に「モボ・モガ」、その後「みゆき族」などと呼ばれた“昔の若者”を、遠い姥捨山でなく彼らの愛した銀座の一等地に受け入れたいと考えたからだ。

数寄屋橋の泰明小学校跡に、「働く」「学ぶ」「運動する」ための高齢者就業支援施設、生涯学習施設、リハビリセンターに「住む」ためのサ高住を併設した上、敷地外の街なかにも銀座全体を高齢者が歩き回ることをサポートするさまざまなフォーリー／ストリートファニチャーを点在させ、心身健康な余生を過ごしてもらいつつ、次代への情報伝達・交換の場となる、点と面からなる壮大な計画を構想した。

東京大学は12月まで卒業論文も必修だったし、その頃無謀に敷地を変えたため、自身の奮闘と後輩たちの助力の甲斐なく、表現は満足にできなかった。後輩の一人が展示室へ掲示に走ってくれたのでビハインドは免れたものの、出席番号1番の「アイサカ」はとても最初に講評を受ける気になれず、そのまま製図室から出なかった。

そんな無様な逃亡劇もあって、記憶から消したかったのだと思う。撤収後は12枚ともレモン画翠の銀の大袋に突っ込み、どこにやったかも気にせぬまま、3月に大阪へ修行に向かうのである。師匠となる安藤先生からは、「ポートフォリオなど要らん。早よ働いて役に立て!」と言われていたのが救いだった。全く振り返ることなく実務に没頭し、死なない程度に休みなく働き、いくつもの現場を経験し納まりを覚え、7年の修行の末、独立した。

まだ負けてはいないという意地

講師にも就いて、さまざまな大学や専門学校で卒業設計や設計課題での順位や評価に悩み、一喜一憂する学生を見るたびに、「僕も卒業設計は間に合っていない。金賞も銀賞ももらっていない。それでも建築家をやっている」と言って彼らを勇気づけてきた。僕らの学生時代には「せんだいデザインリーグ」もなかったし、辰野賞(学内最優秀賞)＝勝者が出なかった学年だったのも、諦めずに設計を続けてこられた一因だと思っている。それを裏付けるように、同期に独立して活躍するアトリエ建築家が非常に多く、皆が互いに負けじと、今も切磋琢磨している。

耐え抜く力と、求める建築の礎

30年ぶりに一度は捨てた自分の卒計を休日の事務所で一人眺めてみると、室名が手描きだったり、パース着彩が薄い程度で、自分が教員なら「なぜ発表しないのか?十分じゃないか」と言ったと思う。初めて感じた。だが、あの時のすさまじい悔しさ、判断ミスへの痛烈な後悔こそ、その後の半生を耐え抜く上での私の原点だったのだろう。

“誰もが緩い経路で隅々まで行き止まりなく回遊でき、所々で眺望の変わる、豊かな空間体験のできる建築”。対象が高齢者から子どもになり、細部は当然洗練させながらも、当時目指したような建築を今では依頼され、いくつも実現できている。有難いことだ。諦めないものだ。

施主が「気に入らない」設計は 設計者の債務不履行となるのか



榎本・藤本・安藤
総合法律事務所
弁護士
安藤 亮

施主と設計者との間で交わされる設計契約。施主にとって自らの理想を実現するために極めて重要なプロセスですが、実際には「自分のイメージと違う」「気に入らない」など、完成した設計への不満が生じることもしばしば見受けられます。私も、施主側からも設計者側からもこのような相談を受けたことが何度もあります。では、施主の希望に完全には沿っていない設計は、設計者の「債務不履行」となるのでしょうか。実務的な視点から考えてみます。

設計者の責任の範囲

設計契約は、設計者が「合意された内容」に基づき設計を行うことを約束するものです。設計者の責任の有無は、契約書や設計打ち合わせ記録などで具体的に定められた要望や仕様、社会通念上の合理性、建築の専門性に照らして判断されます。したがって、「施主が気に入らない」という主観的・感情的な理由だけで、当然に債務不履行が成立するわけではありません。債務の内容がいまいなまま「自分のセンスに合わない」と主張しても、その請求が直ちに認められる、ということにはならないのです。

「気に入らない設計」で債務不履行が認められる場合とは

債務不履行が認められる典型例には、以下のような場合が考えられます。

- ①契約書や設計打ち合わせ等で明確に「こうしたい」と合意した点を、設計者が著しく無視した場合
- ②建築基準法などの法令違反や、安全性、基本性能を著しく損なう設計を行った場合
- ③施主の予算や要望を無視し、事前説明なしに大幅なコスト超過となる設計を行った場合
- ④設計内容に関する誤った説明や重要事項の説明義務違反があった場合

これらはいずれも、単なる好みの問題ではなく、契約で定められた義務や、専門家として当然求められる説明責任といった、検証可能な客観的な基準に照らして判断されるものです。

裁判例の考え方

東京地裁昭和50年4月24日判決は、教会堂の設計・監理に関する事案について、

「通常建物の設計は、建築主の建物の階数、間取り、外観についての希望ないし意見を最大限に考慮すべき性質のものであるが、本件の如き宗教上の建物は、とくに建物の象徴となるべきその外観について建築主が最終的に選択してこれを決すべき要素の強いものであるから、建築家は出来る限り建築主の希望に添って建築設計すべき義務があるが、反面又建築について、建築基準法に定められた建ぺい率、容積率、斜線制限等の制約があり、しかもなお設計者の専門的な技術を尊重してその仕事を協力すべき義務があると言わねばならない。」

としたうえで、設計者が提案した6案の基本設計を策定したこと、およびその内容に鑑み、設計者は施主の希望に基づき、それに沿った設計図の作成に努力していた、と認定し、設計者の債務不履行責任を否定しました。

ケースバイケースではあるものの、上述の裁判例のように、設計者が積極的に意向を確認し、技術的・法的制約も丁寧に説明し、そのうえで設計を行った場合は、「気に入らない設計＝債務不履行」という主張は否定されることになります。

配慮すべきポイント

トラブルを防ぐには以下の点を心掛けるべきでしょう。

- ①施主の希望を具体的に整理し、契約書や議事録などの形で明文化する
- ②仕様や予算等の条件は事前にできる限り明確化する
- ③疑問点に対し丁寧に対応し、相互理解に努める

曖昧な表現や「なんとなくこうしたいのだろう」という思い込みは、双方に食い違いが生じやすく、後々のトラブルの原因となります。トラブルなく設計を進めるためには、双方の情報共有と協力、合意内容の文書化が何より重要と言えるでしょう。

地域に根ざす 建築・まちづくり 事始め



三井所清典

地域に根ざす建築づくりに取り組み始めたのは1977年2月、佐賀県有田町を訪れた時以来である。

有田は江戸時代初期に我が国で初めて磁器の製造に成功し、その後磁器生産を発展させた伝統産業の町である。その有田へ、恩師内田^{よしちか}祥哉先生に誘われ国際陶磁美術館の構想づくりに伺ったのである。当時の青木類次有田町長の案内で有田の現状と歴史の概要を知り、伝統を未来につなぐ熱意が伝わった。磁石の採掘場を見て、さまざまな有田焼とそれらをつくり続ける人々、問屋や小売商の人々に会い、さらに江戸時代から続く町並みを見た。この一連の町ぐるみの生業の様子は衝撃的で、その後の私の建築デザインは地域に根ざすものへと大きく変わった。

国際陶磁美術館建設予定地は町の中心部ではあるが、小高い山を削って造成された台地であった。県立美術館誘致のため土地を準備した有田の強い意志を感じた。有田焼の卸団地はかつて町内にあった卸商の店がこぞって郊外に移転し、片側225mほどの店舗群が向かい合っ

て軒を連ねていた。そこでロンドンのハロッズ百貨店の購買部長の英国夫人に出会った。彼女は近くロンドンで大有田焼展を開くために調査に来ていた。その時、国際陶磁美術館と、名称の頭に「国際」が付いている理由を理解できた気がした。世界には英国のウェッジウッドや仏国のセーブル、オランダのデルフト、ドイツのマイセンなど各国に伝統の焼きものの産地があり、世界を市場にしている有田はそれらと肩を並べる歴史を誇りとし、今後伝統をどう発展させるかを課題にしていたのである。

有田には「古伊万里」「柿右衛門」「鍋島」と呼ばれる伝統の三様式があり、興味深いことに“有田の三右衛門”と呼ばれる象徴的な3人がいて、窯元としてそれぞれの様式を守っていた。その時會った人は、6代目館林源右衛門、13代酒井田柿右衛門、13代今泉今右衛門である。源右衛門は古伊万里の伝統の文様の組み合わせと鮮やかな色彩で現代化し、柿右衛門は12代に協力して「濁手」を復活し、草花の写生をもとにした新しい表現に挑んでいた。今右衛門は12代が開発した更紗模様を展開し、現代的な鍋島様式の文様を創出していた。いずれもそれ

までの様式の枠を広げて、様式を豊かにしていた。3人の生き方に伝統を継承する真髓に触れたと思った。

内山地区は江戸初期から有田の谷合に形成された有田焼の一大産地であり、表の町並みと裏には路地が広がる集落がある。文政の大火で「有田千軒」と言われた家々が焼失し、現在の内山地区は天保以降に再建されたもので、漆喰で塗り固めた防火造の町並みが残っている。

この初めての有田訪問で、国際陶磁美術館構想は有田の伝統産業を継承発展させる動機となることを祈念して企画されたものであることを深く認識した。

国際陶磁美術館構想から最初に実現したのは、町並みの東端にできた「有田町立歴史民俗資料館」(1978)である。360年の歴史を背負った建築で、内部の機能も外観的にも歴史を象徴し、町並みと調和する建築でなくてはならない。しかし、国際様式の現代建築のデザイン教育を受け、十数年の修練を積んでいた私にとって難しかったのは勾配屋根と庇を付けることであった。頭では十分わかっているが、いろいろ屋根の検討を重ねてもどうしても「陸屋根」の建築が美しく見える。最後は内田教授の「降ってきた雨をできるだけ早く外壁の外に流し、外壁からできるだけ遠くに落とすようにすると、雨漏りはなくなるし、外壁の傷みも少なくなるよ」という言葉で諭され、寄棟で庇の深い屋根の建築の設計ができた。建築が竣工し、外構植栽が整ってみると実に美しい。名前にふさわしい建築が出来上がり、有田の人々にも喜んでもらった。

この一度の屋根の体験で私は「陸屋根の呪縛」から解放され、続く「国際陶磁美術館」(1980、完成後の名称は佐賀県立九州陶磁文化館)の設計では、所定の丘の上に大きな館と4棟の蔵が並んだような有田らしい建築群の設計が形に悩むことなくできた。建築に対する美意識が柔軟になったのである。勾配屋根と庇のある公共建築は有田の風景や景観形成に寄与し、有田の個性の継承発展にもつながっていると思う。この後は地元の設計事務所の人たちと協働して有田らしい建築・まちづくりを進めていった。

時が育む暮らしの場

川島真由美



設計事務所を構えて20年。住宅を中心に多様な暮らしと向き合ってきた。形となった建築を見つめるたび、課題と可能性に気づく。その積み重ねが次の設計の糧となり、今もなお答えのない感覚を胸に試行錯誤している。

思い出深い仕事のひとつに、認定こども園の設計がある。以前住宅を手がけた建築主からの依頼だった。公共建築とも住宅とも異なる難しさがあり、資金計画や将来像への不安を抱える建築主と幾度も対話を重ね、課題を一つずつ解きほぐす過程は膨大な時間と労力を要したが、地域や関係者の存在を意識しながら、将来の子どもたちにとって最良の環境を共に模索した経験は、建築家の使命を改めて実感させてくれた。園舎は内外を緩やかにつなぎ、光や風、空や緑を取り込み、周囲の環境と調和するように設計した。成長段階の異なる園児が自然に集い、共感を育むと同時に、一人ひとりが安心できる居場所も確保した。この過程で、確かな骨格を持ちながらも、空間と心に広がりを感じさせるおおらかな構成が、個や小さな事象を柔軟に受け止めることを再認識した。

私が目指すのは、求められる条件を満たすだけでなく、社会的に開かれた場と個を尊重する居場所を両立させ「場の質」を高めることだ。日々の暮らしで人や時間、地域とのつながりをそっと感じとれる環境を届けたい。土地の記憶や文化を大切に、現代の技術や感性と融合させた持続可能で環境と人に根差す建築はこれからますます重要になる。思い描く建築家へはまだ歩みの途中。だからこそ、建築の可能性を信じ、人と暮らしに寄り添う場を通して、ささやかでも未来を形づくる一片になればたらと願っている。



認定こども園なこそ幼稚園 (2017)

柵の無い日本と、まざる建築

山路哲生



先日、フィリピンのマニラに行く機会があった。プロジェクトの現場があるBGCという地域は高層ビルの建ち並ぶ国際都市であり、グローバル企業が入るオフィスビルやタワーマンション、また大規模なショッピングセンターが広がる。また、空港からBGCに向かう間のマカティという地域には戸建ての高級住宅街があり、これら富裕層向けの街の周りには「柵」で囲われている。財閥を中心とした富裕層と地元住民との間に物理的な境界があり、隣り合いながらも生活の様子は柵を隔てて一変する。このようなゲーティッドシティに親しみのない日本人としては幾分差別的にも感じられるが、とりわけ銃の携帯が許されるフィリピンのような国においては、セキュリティ上の必要性も理解できる。日本で都市計画法(新法)が制定されたのは1968年。日本初の超高層ビル霞が関ビルディングが建ち、皇居のお堀を埋め立てまで高速がつくられた。安保闘争、東大紛争などの出来事からも規制が必要とされる混沌とした社会背景がうかがえる。ではスプロールが終焉し都心回帰、人口減少が進む現代の日本においてはどうか。

昨年竣工した当社設計の「銀座高木ビル」は頂部4層を部分木造とした、鉄骨との混構造だ。一見増築かのような露骨な複合化は、純粹主義的近代の原則からは反している。銀座によく見られるファサードだけを1つのブランドで覆った「見せかけの統一」ではなく、木質化の社会要求や不動産の効率性、広告的シンボリズムなどの欲求を正面から受け止めたうえで、都市の活動を生き生きと立体的に拡張している。「まざり合う」ことを許容し、銀座のムラのダンディズムに酔うことなく、秩序の限界

を超えた対立にもつじつまを合わせながら「まざる建築」として毅然と立ち振る舞っている。

事務所を開設して10年。これからも建築に伴う必然的な矛盾を楽しみつつ、豊潤で饒舌な建築を設計し、都市に貢献していけたらと思う。



銀座高木ビル (2023.5)

交流委員会 Bグループ

年間活動報告

—納涼会やセミナー、見学会で親交を深める—



交流委員会
Bグループ代表幹事
シーカ・ジャパン
安藤達彦

交流委員会Bグループのご紹介

私たち交流委員会Bグループは、正会員5名と防水材・左官・塗料・吹付材を取り扱う法人協力会員（メーカー）8社（9名）で構成されています。毎月の定例会を対面・Webのハイブリッド会議で開催し、JIA活動の情報共有や年間グループ活動の立案・検討を行っています。会議後の会食・懇親も含め活発に活動しています。

年間行事は定例化されつつありますが、夏季（7月）の納涼会とサロンセミナー・懇親ゴルフコンペ（9月）、建物見学会（12月）を2025年度も実施します。

納涼会

今年の夏本番、梅雨明け前日の7月17日（木）に、江東区清澄にある都指定名勝「清澄庭園」の涼亭で、本年度の納涼会を開催しました。涼亭はその名の通り、大泉水（池）からの涼しい風が気持ちよく、毎年納涼会にて利用しています。本年は交流委員会の河野委員長、長坂副委員長もご参加くださり、合計16名で美味しい食事とお酒とともに制限時間ぎりぎりまで談笑し、穏やかで楽しい時間を過ごすことができました。

サロンセミナー・懇親ゴルフコンペ

2024年は9月6日（金）にベルビュー南熱海にて、東京工業大学名誉教授で工学博士の和田章様を講師にお迎えしセミナーを開催しました。翌7日（土）には川奈ゴルフコース大島コースにて懇親ゴルフコンペを開催し参加メンバーの親睦を深めました。

本年も9月19日（金）、20日（土）にサロンセミナーと懇親ゴルフコンペを開催しました。場所は静岡県伊東市にあるサザンクロスリゾート。セミナーには、講師に元自衛隊 西部方面総監・陸将を務められた本松敬史様をお迎えしました。

建物見学会

2024年末の12月10日（火）に外苑前駅からほど近い青山通りに面する「3rd MINAMI AOYAMA」を訪問し、設計をご担当された三菱地所設計チーフアーキテクト 本田輝明様にご案内いただきました。各テナント向けアウター／インナーバルコニーや屋上のテナント専用ルーフトップテラス（夜景がとても素晴らしい！）、階段室や天井・外壁ECP板の壁画アートや緑豊かなパークテラス等のご説明をいただき、建物見学会を実施しました。本年も12月に建物見学会を計画しています。

その他、11月に開催されるJIA建築家大会の支援や、フレンズカップ、他グループとの交流活動等のイベントにも積極的に参加し皆様と一緒にJIA活動を盛り上げていきたいと思っています。

おわりに

本年度よりBグループ代表幹事を仰せつかり数ヵ月、Bグループメンバーや交流委員会、事務局の皆様のお力添えをいただき企画・運営ができていること、改めて感謝申し上げます。

今後も協力会員としてJIA活動に貢献できるよう尽力して参ります。



納涼会を行った江東区清澄にある都指定名勝「清澄庭園」



納涼会参加メンバーで記念撮影

交流委員会 Dグループ

施設見学会・懇親会開催

—共同カイトックオフィス見学会—



交流委員会
Dグループ
共同カイトック
にえだ
賛田大河

本社ショールーム・オフィス内見学会を実施

交流委員会Dグループでは、5月13日に恵比寿ガーデンプレイスタワー23階にて、共同カイトック(株)の本社ショールーム・オフィス見学会を実施しました。

当社は2024年8月に本社を移転しており、これに際して整備したショールームにて、当社の事業内容と各製品の特長をご案内させていただきました。



ショールーム内の模型
とバスダクトの展示

人と社会に快適テクノロジー

共同カイトックは1950年に共同電気(株)として産声をあげ、当初は電線管やその付属品などを製造販売していました。その後は1958年にバスダクト、1986年にはOAフロア、2006年に屋上緑化システムの製造販売を開始するなど、事業の幅を拡大してきました。そのさなかで、当社は全ての関係する人をテクノロジー(技術)で快適にしたいという想いと共に、1992年に社名を共同カイトック株式会社に変更しています。

バスダクト・OAフロア・屋上壁面緑化

Dグループは内装工事、内装材、家具、エクステリア材分野であり、内装材のひとつであるOAフロアについてはご存知のことも多かったと思いますが、ショールーム内で製品の踏み比べを行ったり、改めて細かい納まりを見ていただいたりと、新たな発見があったとのお声もいただきました。サーキュラーエコノミー実現へ貢献するリユース・リサイクルの取り組みについてもご説明させていただきました。

電気設備のバスダクト・建物外部に設置される屋上・壁面緑化については、そもそもどこでどのように使われるのか、ということからご案内しました。バスダクトは建物における電気の大動脈のような働きをし、大型化・高層化が進む建築物には欠かせない存在となっています。

屋上・壁面緑化はヒートアイランドの緩和やコミュニケーションスペースの創出に役立つだけでなく、近年では生物多様性の観点からも注目される事業です。

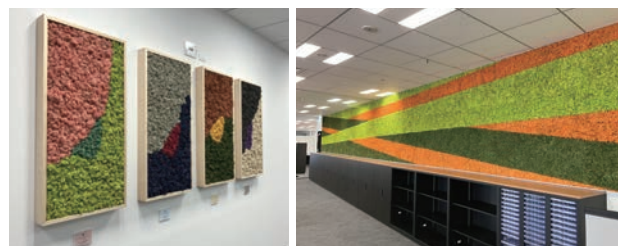


階段状に設置されたOAフロア展示

この3事業は一見つながりが想像しづらいですが、電力幹線のバスダクトで供給された電力が分電盤を経由し、OAフロア内の配線を通して利用される様子、屋上緑化がユニット式OAフロアの構成をもとに発想・制作されたことなどを、模型を用いてご案内しました。

生きているインテリア「スカンディアモス」

特殊な生物を使った装飾材にも注目が集まりました。アートのような使い方ができ、オフィスやエントランス、リフレッシュスペースなどを彩り、独特な手触りも相まってインパクトのある空間を演出します。



オフィス内に設置された天然のコケを使用した装飾材「スカンディアモス」

最後は懇親会でコミュニケーション

Dグループでは協力会員のショールームや納品後の建物見学会など、会議室を離れて実物に触れるような活動を定期的に行っています。会社の取り組みや製品に対する正会員の皆様からのご意見をいただくだけでなく、協力会員同士の意見交換も行える貴重な機会となっています。自由参加の懇親会の場合でも活発なコミュニケーションが行われました。

今号は、学生会員個人の活動を紹介する「次世代のタマゴたち」を2名お届けします。

次世代のタマゴたち



卒業制作にあたって

学生の会 @joint 谷 侖多
東京電機大学建築学科4年

卒業制作という自作自演がもうすぐやってくる。自分がクライアントとなり、設計者となり、批評者となる。課題を見つけることから始まり、その課題が「存在するに値する」と証明しなければならない。しかしその課題は、現実の社会が直面している必然から生まれるものではなく、学生自身の視点から生まれる。そのねじれが、卒業制作の複雑さと豊かさを生んでいるように思う。

実務ではクライアントがいて、予算があり、条件が与えられる(用途まで任せられることもあると思いますが)。しかし卒業制作は、課題を自ら発見し、設定しなければならない。「なぜこのテーマを選ぶのか」という問いに、終始付きまといられる。建築を通して社会に対して何を問いたいのか。それを見失えば、単なる作業となる。

一方で、まだ何者でもない学生が、つまり立場のない学

生が、あらゆる立場となって課題に挑む。自身との対話と言ってもよい機会だ。複雑化しすぎた社会に目を背けたい一方で、自分は何を生み出すのか楽しみでもある。

卒業制作に関してはこれまでも散々語られてきたが、私の解釈は「実話に基づいたフィクション」をつくるということである。上京してきて感じた、その実話になり得ることを記す。

地方では、あらゆる選択肢が少なく、半強制的なコミュニティも多い。買い物をするにしろ選択の余地はなく、この辺に住んでいる人は皆このこと決まっている。生きているだけで、近所と顔を合わせコミュニティが形成される。

一方、上京してからは、大学という機関以外でのコミュニティとなると、自ら行動する必要がある。これに気づいたのは大学2年の頃だった。まちの古着屋、美容室、喫茶店、いろいろな場所に顔を出して話しているうちに、大きなコミュニティに属していることに気がついた。人と人がどんどんつながっていく感覚があった。

ひとえにここのコミュニティは希薄だと決めつけるのは見当違いで、当事者としてまちに介入することで見えてくるものがあるという、大事な視点を得た気がした。

次世代のタマゴたち



建築から考える「豊かな暮らし」とは

学生の会 @joint 小柳日菜子
昭和女子大学環境デザイン学科3年

今期の集合住宅の設計課題を振り返り、「豊かな暮らしとは何か」という問いを考えるようになりました。

同級生の多くの作品が、コロナ禍を経て再認識された「他者とのつながり」をコンセプトに、交流を促す空間を提案していましたが、私はその認識に対し違和感を抱いています。人々が集まり、交流し、偶然の出会いが生まれることが、豊かな暮らしに直結するという前提に立ちすぎているのではないのでしょうか。もちろん他者との関わりがもたらす「外面的な豊かさ」は存在しますが、人との距離を取らざるを得なかった時期に、家族と囲む食卓や、自然に囲まれて一人で静かに過ごす時間の中にも、豊かさを見出した人は少なくありません。

この「内面的な豊かさ」を育む空間こそ、現代の建築に求められている価値ではないかと考えます。この思想の象徴は茶室です。茶室は、露地からにじり口をくぐり、外部



大学のプロジェクトでデザインした茶室。この時・空間の体験が、私の設計思想の原点となった。

の世界を完全に遮断することで、亭主と客、そしてその空間だけが存在する空間を創り出します。

現代社会は情報に溢れ、常に誰かと繋がっていますが、そのような時代において、本当に豊かな暮らしとは、強制された交流が溢れているのではなく、意図的に隔絶して、時に他者と交わり、そしてまた独りになる、これを自らの意志で選ぶことなのではないかと思います。建築は、多様なライフスタイルや価値観を受け止める器をつくることができます。個々人の豊かさを追求できるような選択肢を提示することを意識して設計に取り組みたいです。

クラシック音楽との長い付き合い

私がクラシック音楽に目覚めたのは小学校の5年生ぐらいで、例の音楽鑑賞の時間でかけられた「運命」か「新世界」のどちらかだったと思います。もちろん全曲なんて聴ける我慢強さは持ち合わせておりませんでしたので、一番目立つところのつまみ食いでした。そのままゆるーい付き合いが続きますが、それを変えたのが大学の友人との出会いです。私は1曲1演奏者が当たり前と信じ切っていたのに対し、彼は1曲に10の異なる演奏者を聞き分けていました。同じ楽譜なのだから同じ演奏になる、のではなく、演奏者により別物の音楽になることを知ってしまい、ここからが泥沼の始まりです。

ちょうどそのころ、カール・ベームがウィーン・フィルと来日することになり、苦労してチケットを入手し演奏会に出かけました。ところがその演奏の良し悪しは自分では判断ができず、友人が良かったと言えば「良かった」と思うし、先輩が悪かったと言えば「そうか悪かったんだ」と思う始末です。つまり耳が幼かったのです。特に生演奏になれていないと雰囲気は圧倒され、細部を聞き分けることができないのです。

美大の先輩が小澤征爾さんと親しかった関係で、オーケストラのリハーサルを何度か聴ける機会に恵まれました。小澤さんの指示によりどんどん演奏が良くなっていくのが分かるようになり、完全に小澤ファンになってしまいました。

松本で事務所を開業した数年後、1992年からサイトウ・キネン・フェスティバル松本が始まりました。チケット販売の前日からテントを張り、並び続けて毎年聴くことができています。コロナのころから窓口販売がなくなりネット販売となりましたが、本当に長い付き合いです。

幼かった耳も成長を続け大人になりましたが、最近は何年を取りすぎ細部が聞こえ難くなっている気がします。音楽鑑賞と図面描き、どちらが長続きするか？秒読みに入りました。

(荒井 洋)



1977年ウィーン・フィル日本公演のチラシ

支部総務委員会からのお知らせ

支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は、2025年度以降「メール等の電磁的方法」で行います

2024年度は電磁的方法の実施に向けた事前意思確認を行い、2025年度以降は支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は「メール等の電磁的方法」に移行していきます。ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、会員の皆様に電子メールが確実に届くよう、電子メールアドレスの変更は必ず事務局までご連絡いただきますようご協力をお願いいたします。

編集を終えて&秋だなと感ずること

- まだまだ最高気温が30度を超える日が続いていますが…通勤時に感じる草や土の“匂い”は、秋らしくなってきました(渡辺)
- フィンランドから9月に帰国したら、猛暑もところなし和らいでいるような。確実に季節が進んでいるのを感じました。(関本)
- 小倉編集長になって2号目の秋号、新体制の連携も少しずつ取れてきたように感じています。(永峰)
- 昼間の汗をまといつつ帰路につく途中で聞こえる虫の声に秋の訪れを感じます。(知見)
- 幸水と二十世紀が今年も届きました。みずみずしい味わいに秋の訪れを感じます。(小山)
- 毎朝庭に出て空を仰ぎ深呼吸。爽やかな雲を眺めて家に入ると、だんだん暖かいものを飲みたい季節になってきたなと感じます。(大塚)

編集後記

- 田圃に隣り合った住宅竣工間際。稲刈りはまだ先だろうと、撮影を油断。早生米に先を越され、秋風に笑われました。(井原)
- 都心では目にすることが少なくなりましたが、赤とんぼが澄み切った空に舞う光景に出会うと、残暑の中にも秋の訪れを感じます。(杉本)
- 特集第2弾「エンジニアから見た建築デザイン」では、建築に携わるベテランエンジニアの普段は見えない内面に迫らせていただきました。(小倉)
- 黄金色に輝く稲穂、実りの季節を迎えた田んぼ。(竹内)
- 9月初旬にフィンランドのアルト建築ツアーに参加。日本の秋のような「フィンランドの夏」美しい自然と建築に大満足。(田口)
- どこか儚く、安らぎを感じられる秋の虫の音を聞けると嬉しくなります。(佐久間)
- JIA千葉大会、皆様のご参加をお待ちしております。(磯野)

今年度より『Bulletin』は発行回数が年3回になりました。今後はメールマガジンも活用して情報を配信してまいります。

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 田口知子
副委員長 : 永峰麻衣子
委員 : 竹内祐一・佐久間達也・小倉直幸・小山光・大塚浩子・磯野智由・渡辺猛・杉本憲治・井原正揮
編集長 : 小倉直幸
副編集長 : 渡辺猛・関本竜太
編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・関本竜太・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 305 2025 秋号
発行日 : 令和7年10月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 コラボ
■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2025



GOOD DESIGN AWARD 2020

BEST 100

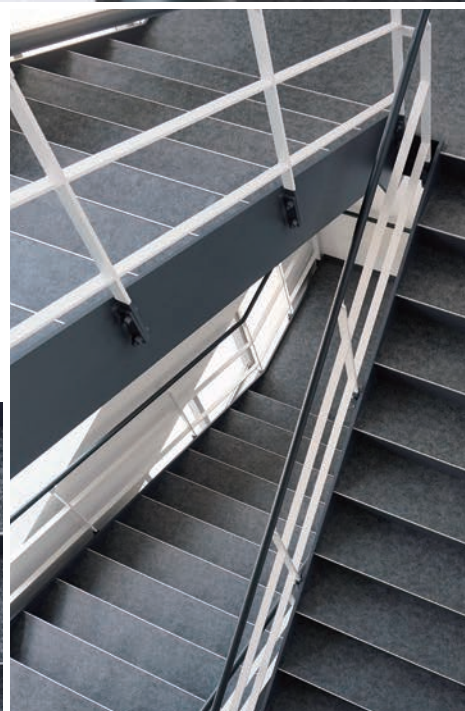
ノンスリップでは
初のグッドデザイン賞
ベスト100受賞

Previo T

室内鉄骨モルタル階段用ノンスリップ /
段鼻保護見切り

くらしの視点、建築の視点。

アシストは50余年の歳月をかけて「あしもとカナモノ」を探索してきました。その歴史のなかで培ってきた技術とノウハウを、建築家やデザイナーの方々と見つめなおし、「現代のカナモノ」について考え続けています。建築空間との調和、スマートな納まり、美しいディテール、そしてシンプルなデザイン——。AFOLAは、住む人、働く人、設計する人の考え方、感じ方を大切に、いままでにないカナモノの開発に挑戦します。



株式会社 アシスト

大 阪 本 社 〒546-0003 大阪市東住吉区今川4-11-3 T.06-6703-5670
東京営業所 〒121-0075 東京都足立区一ツ家3-11-4 T.03-3859-5670
福岡営業所 〒812-0888 福岡市博多区板付1-3-4 T.092-433-5678

AFOLA

www.afoladesign.com